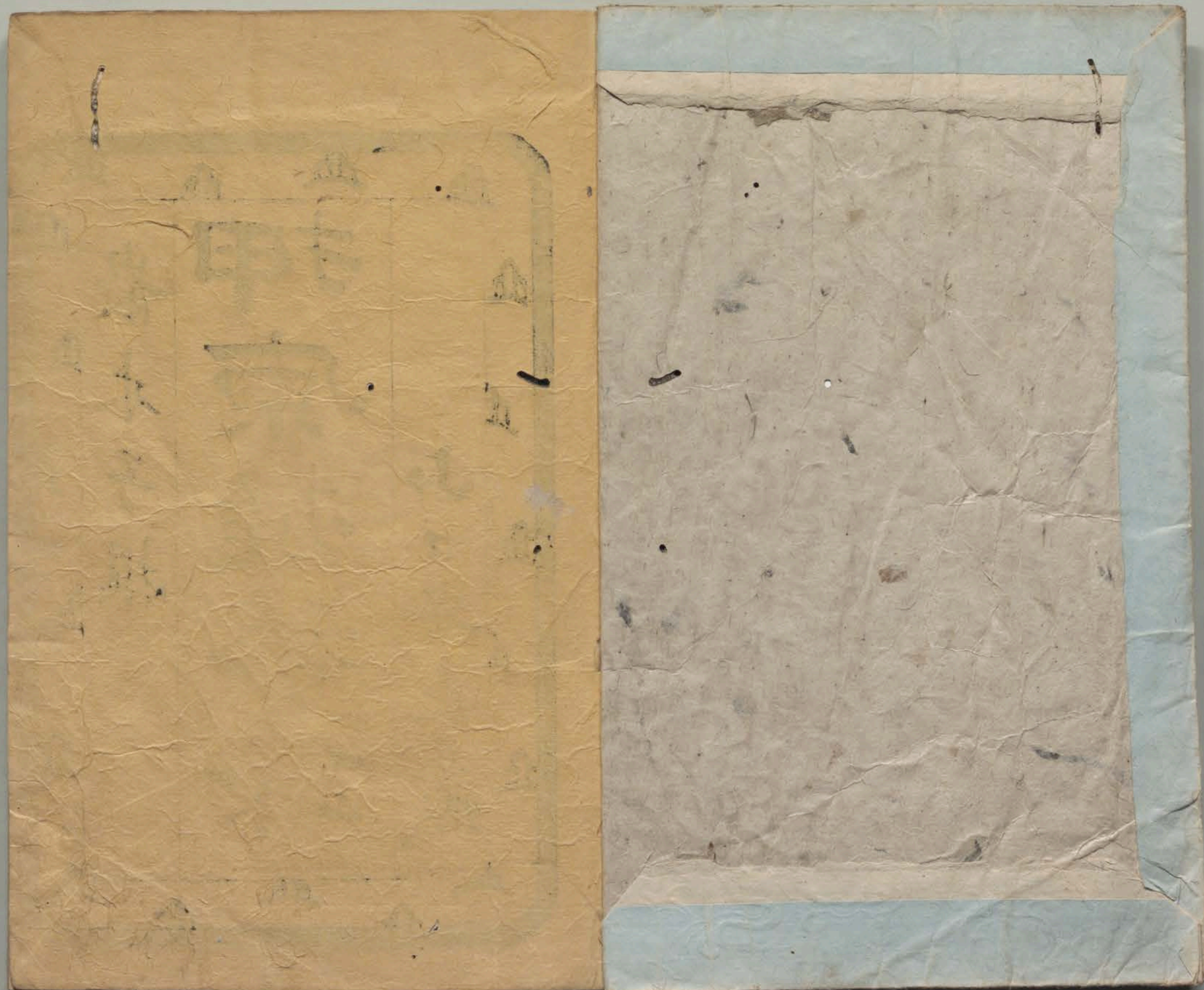
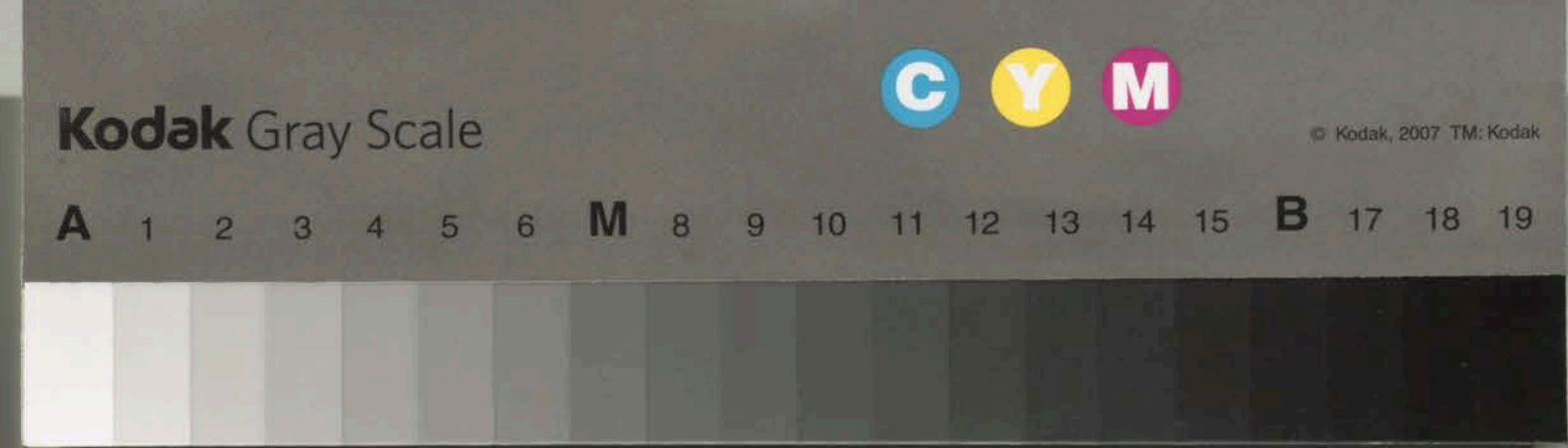


142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1

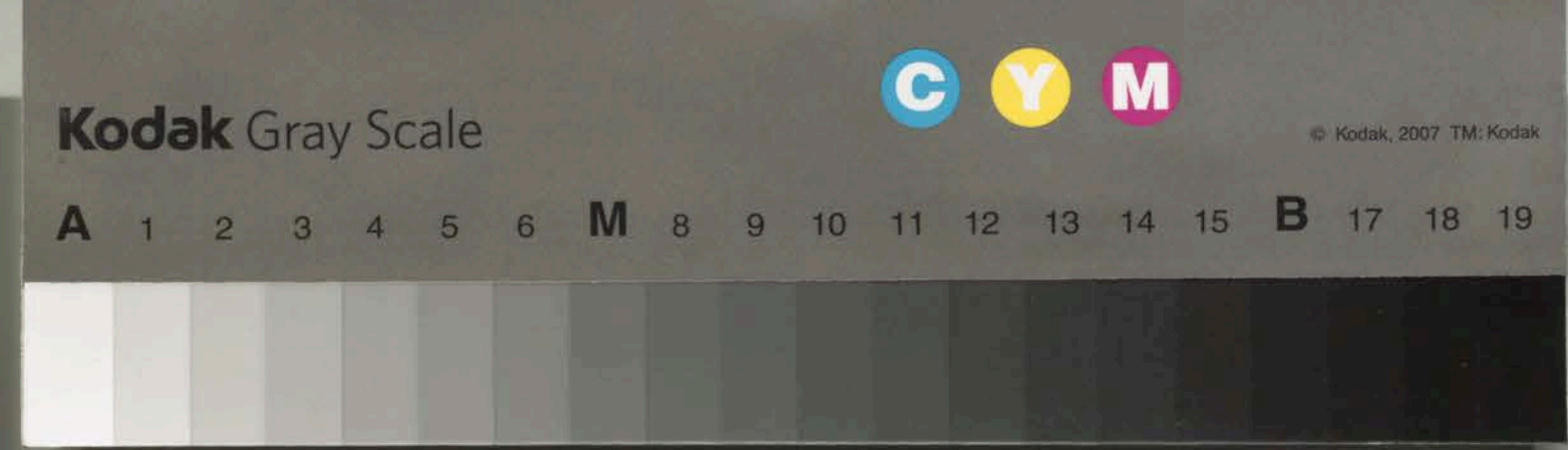




142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1

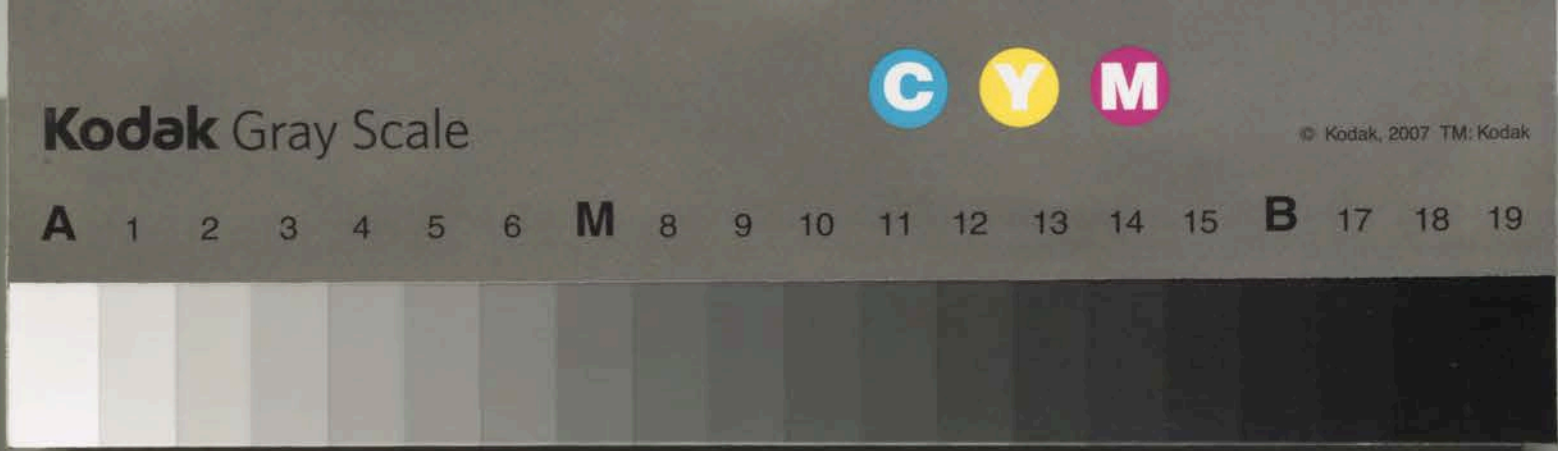




142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





押原推移録序

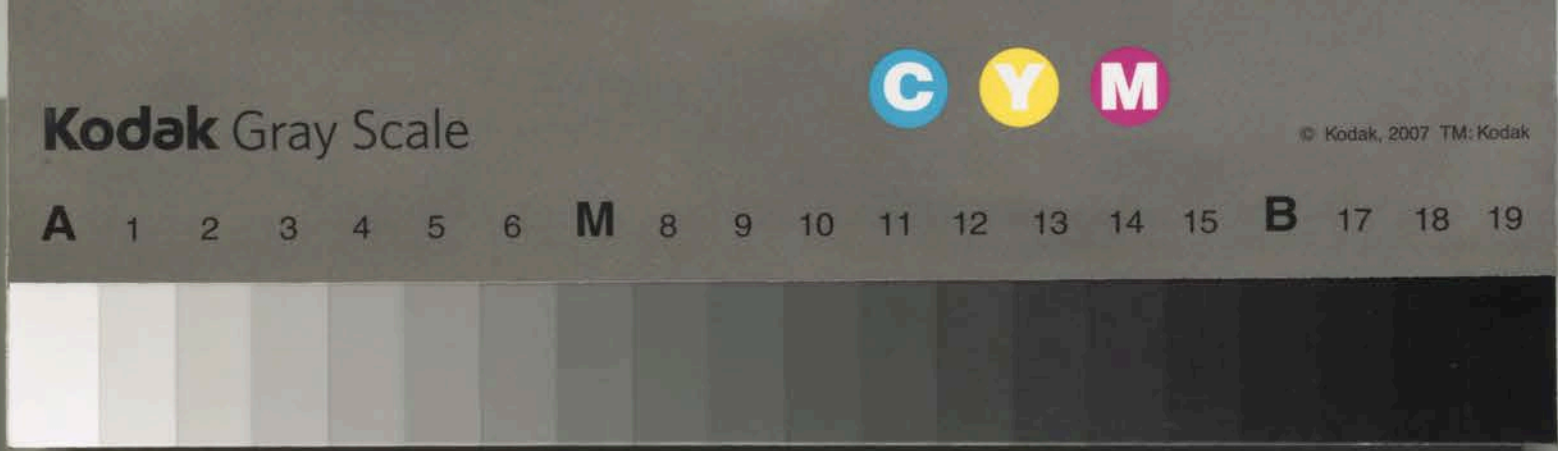
押原推移録序  
古王室之盛也、寶龜六年始置大少目  
員於下野國、天安二年置大少掾各一  
員、掌録事、又有史生、書記雜事、雖然後  
世國志之存稀也、况保平以還、王官不  
知政事、文章與時陵遲、而記述無或之、



142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1

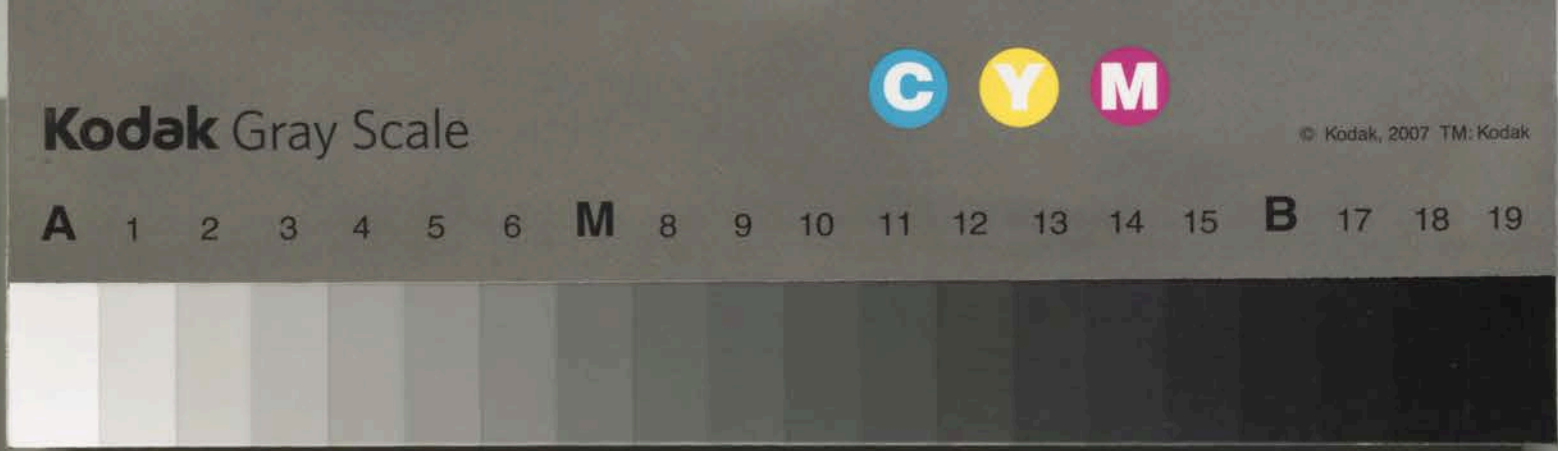




慶元建橐以降、操觚之士、隨世多往往  
 有撰國志者矣、予友散木子編戶之民、  
 而有好古之癖、置書於坐右、高賈之暇  
 學文、頗通本朝之學、人見其如此、雖帳  
 中之秘、携來眎之、日手謄寫抄錄、撮其  
 要成若干卷、題曰押原推移錄、載籍所  
 傳、口碑所存、廣考舊記、正異同、芟煩蕪、  
 補殘闕、關押原之故事者、載無遺漏、可  
 謂能勉矣、今茲梓成、以為 今宮神庫  
 藏板、他日或修國志者、必取徵於此書  
 矣、勿妄為街談巷語、散木子但謂生其  
 土、居其鄉、不知其故事可乎、嗚呼毛野

押原推移錄序





編戶之民而有修書如散木子者昌平  
 文運之化於斯盛哉予喜叙其  
 文政丁未夏五月鈴木之綱題于晚翠  
 樓上

帛川藤田安正書

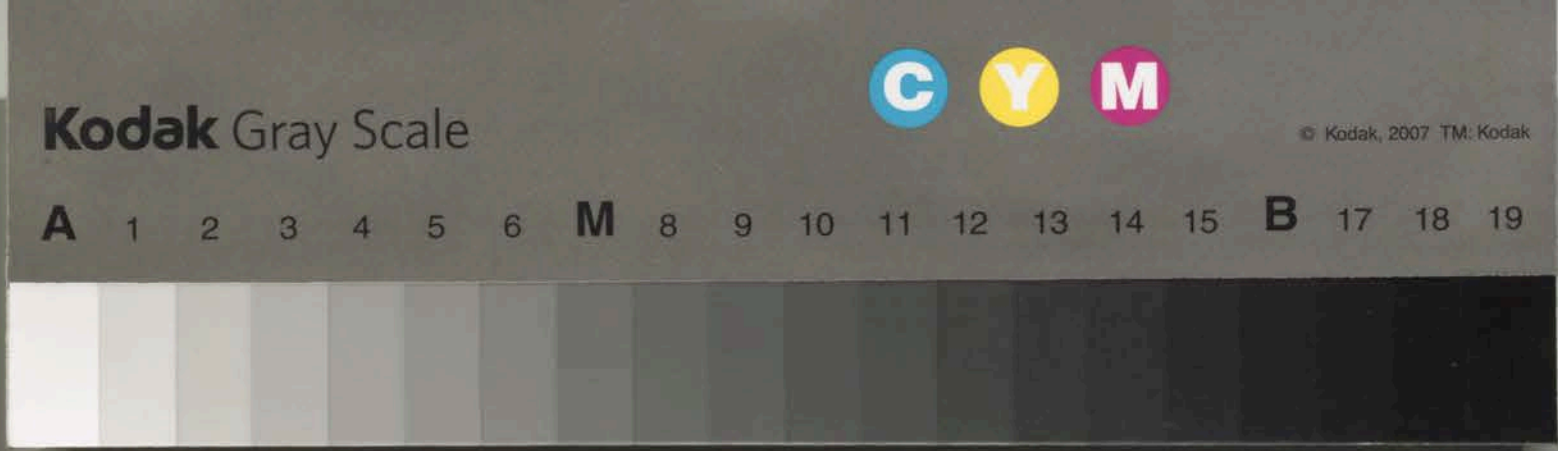
押原推移錄序  
 古之國志存於今者經歷久遠  
 則不能或忘殘闕况後世記事  
 者或浮華煩擾或牽強附會  
 失實而不鮮此士君子之所以不  
 能無憂也下毛押原山口安良  
 才氣雋爽博聞強記憂其士

押原推移錄序

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

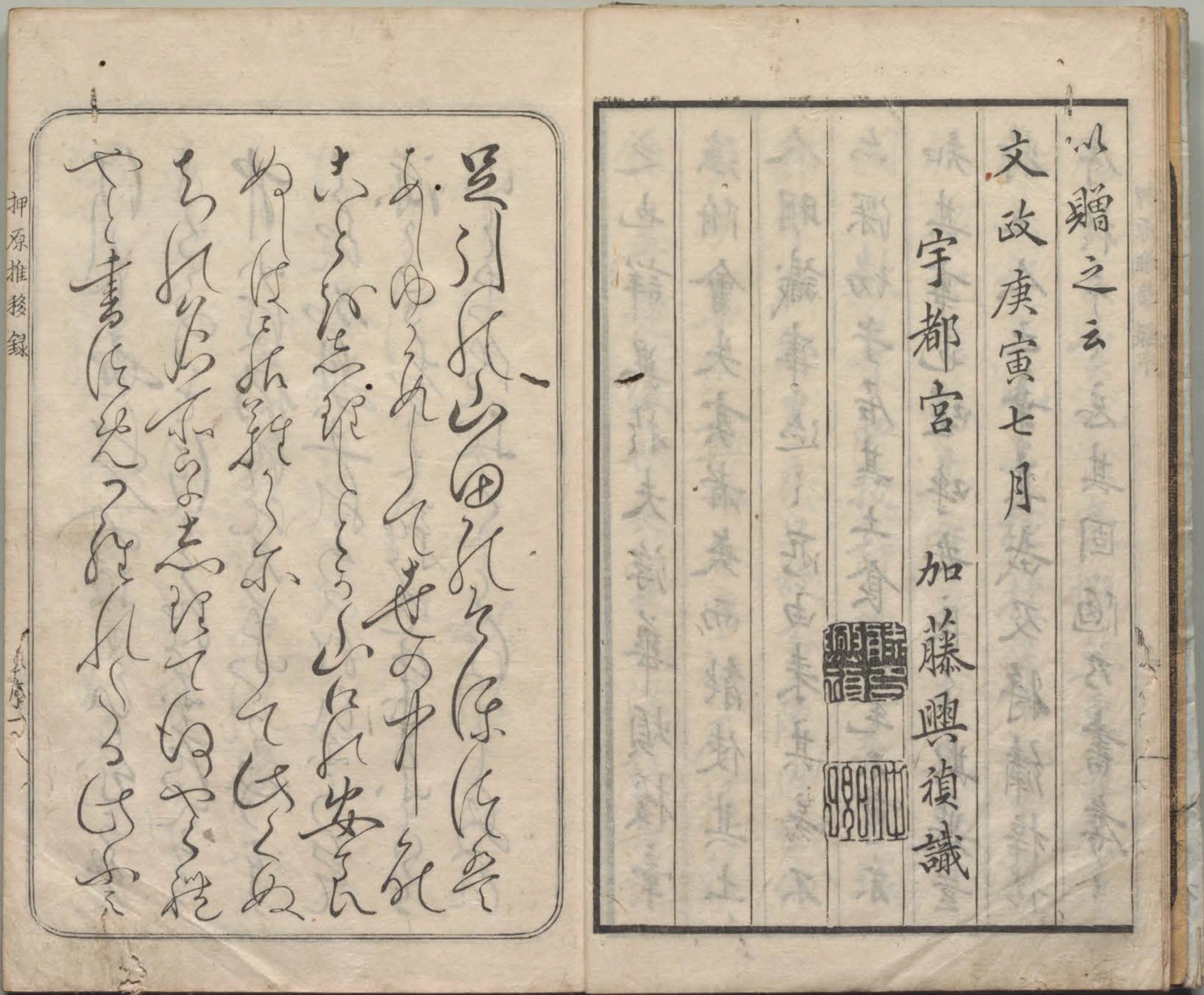
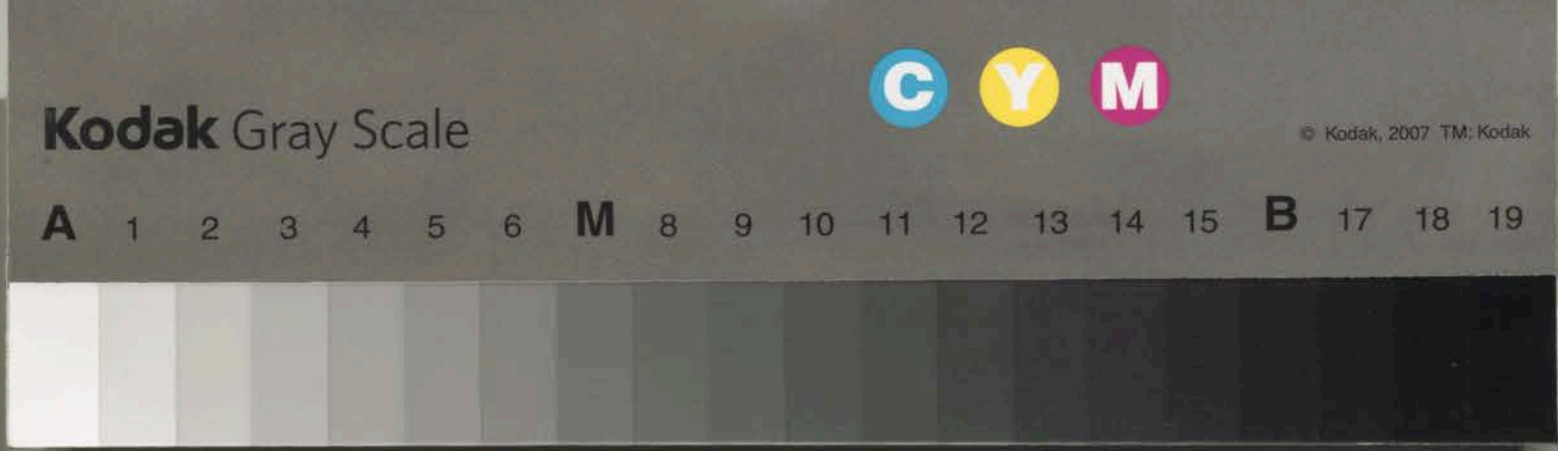
C46-9-1





舊記失實也久矣慨然更記其事  
 迨其祀之也上根據舊記下採  
 摭私記唯勤其實不求其華  
 閱之數年而校訂略完其書城  
 郭寺社鄉里戶口故事陳迨巨細  
 多少無不盡也名曰押原推移  
 錄蓋憂後世失實也深故其記  
 之也詳異於夫浮華煩擾章  
 強附會失實者矣而能使其土  
 人明識事迨之匪由來其意不  
 亦深切乎居其土食其毛不可不  
 知其事也嗟呼安良之斯舉豈  
 特土人之幸甚哉及將續梓請  
 序於予之忘其固陋乃書卷之  
 押原推移錄序





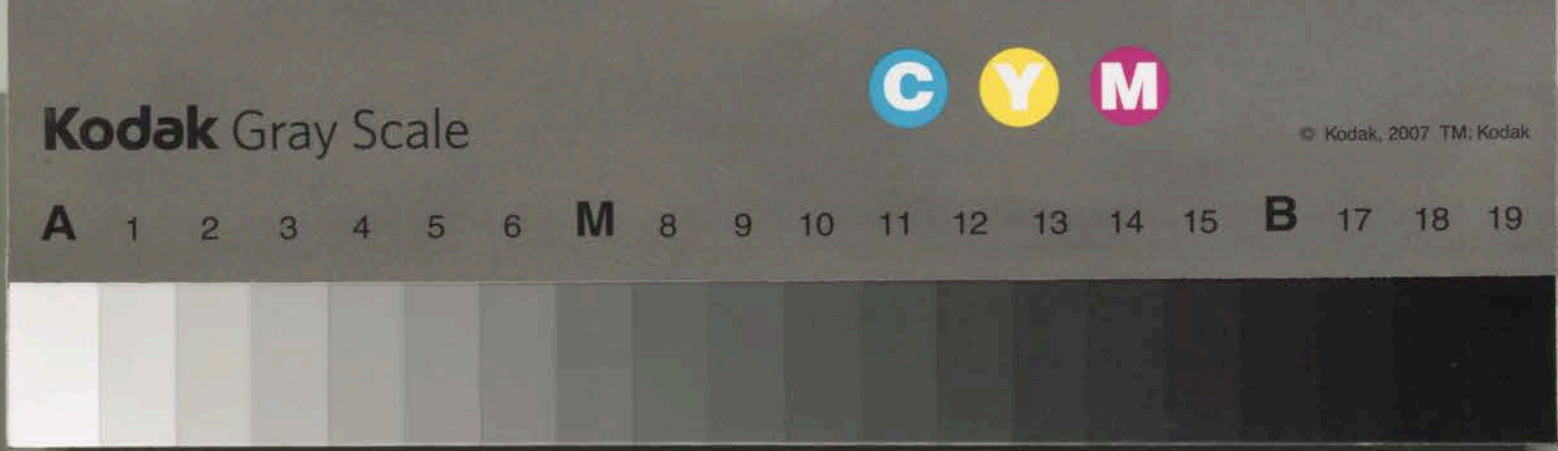
押原推移録

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1







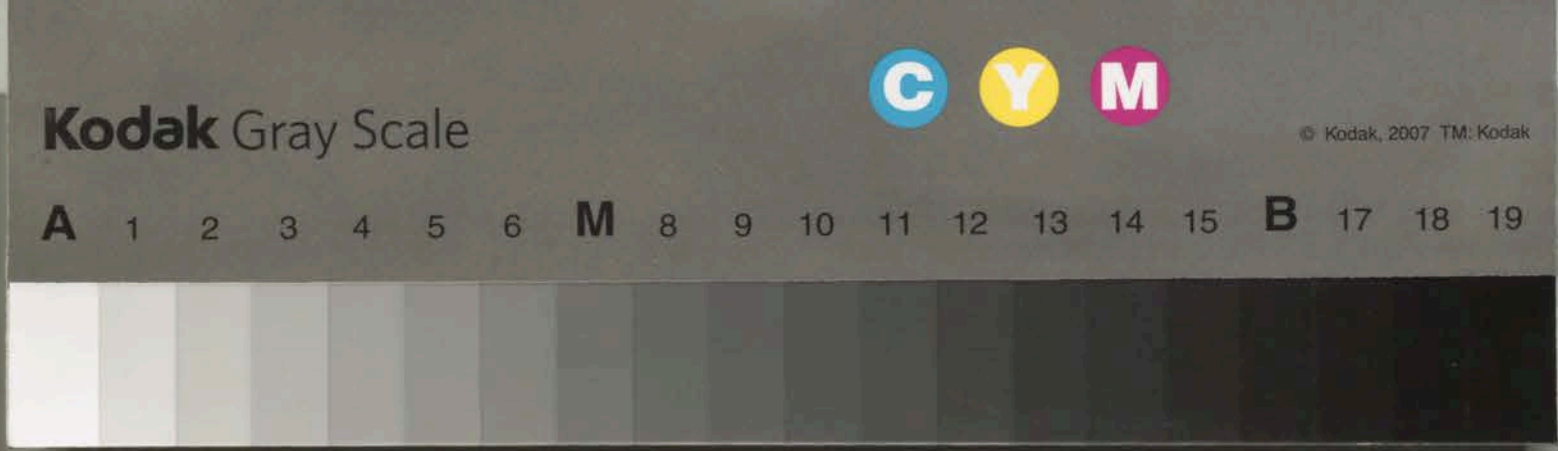
押原推移録

何れ毎々おのゝく  
 中は福に比るま  
 誦し書し難く生  
 一し書し難く生  
 何れ毎々おのゝく  
 中は福に比るま  
 誦し書し難く生  
 一し書し難く生

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





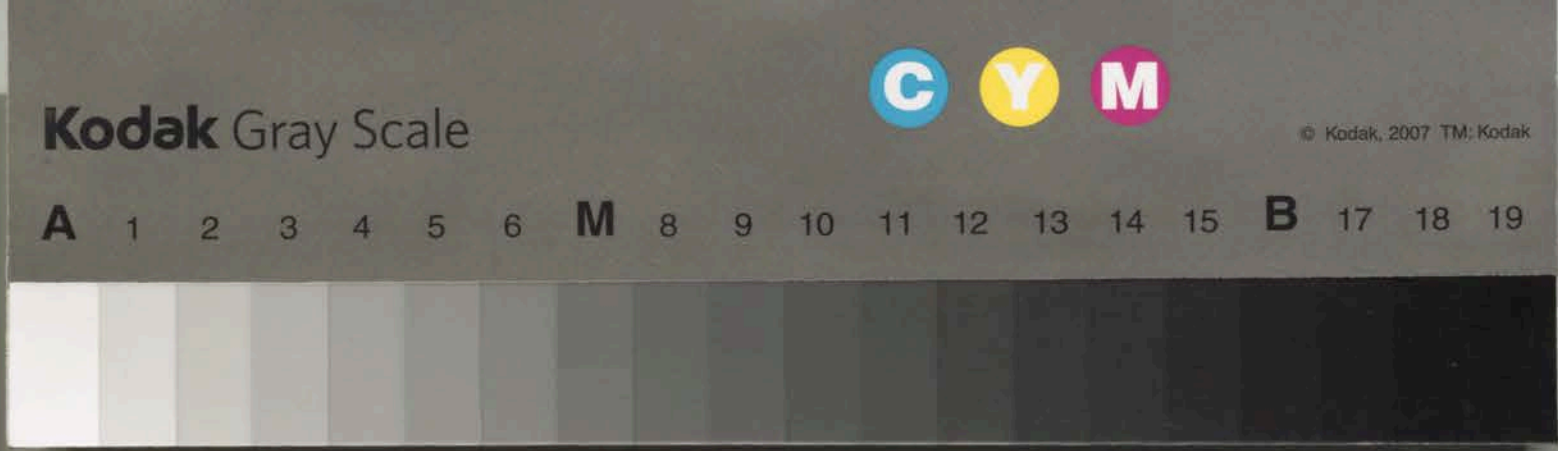
押原推移録  
 自序  
 龜城乃山廻松蔭を以て法代を成  
 風土記を以て心算を以て里を以て國俗  
 孔事毎代志を以て遺れたる之  
 可憐安の想を以て一書を免る理し  
 を幾多の河に水降りて世  
 のまろく元龜天正の年一統

典國年覽

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





頃西むよはをのち中いたる列流  
 のみは波を浦亂を風を音を  
 しくしく之をのまのまを身  
 か汁満くも思き白皇の大宮を  
 も火の天不掛りとうに  
 美の度うしき程は女の心  
 書もれおのういふはる心矢

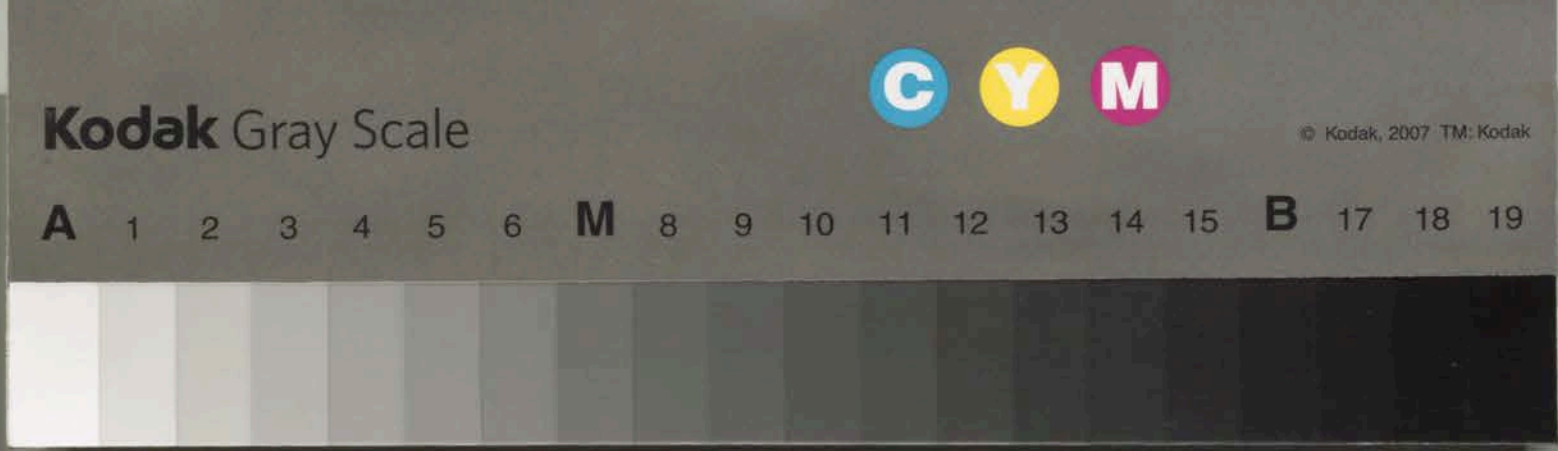
ぬる女安さを最惜む平安の如  
 ちありまのまの程は我を女  
 の手ぬ原のまの聖れ道遠き  
 かな何そつ葉のまのうそ  
 於えの指色からまを女を  
 しくお汁満りの心の残り  
 心しくまをのまの心志る  
 心しくまをのまの心志る

押原推後録  
 〇序二

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





唯依いなる字もあはれ書きしを  
 心より通ぬるにほのえを流  
 もあはれとるれしも大空の雲  
 形跡をなれそ支ゆるさきし佳  
 こころをたのみのみあせし  
 志もあはれしゆたのれ信墨  
 華の花いもあはれしゆたのれ心

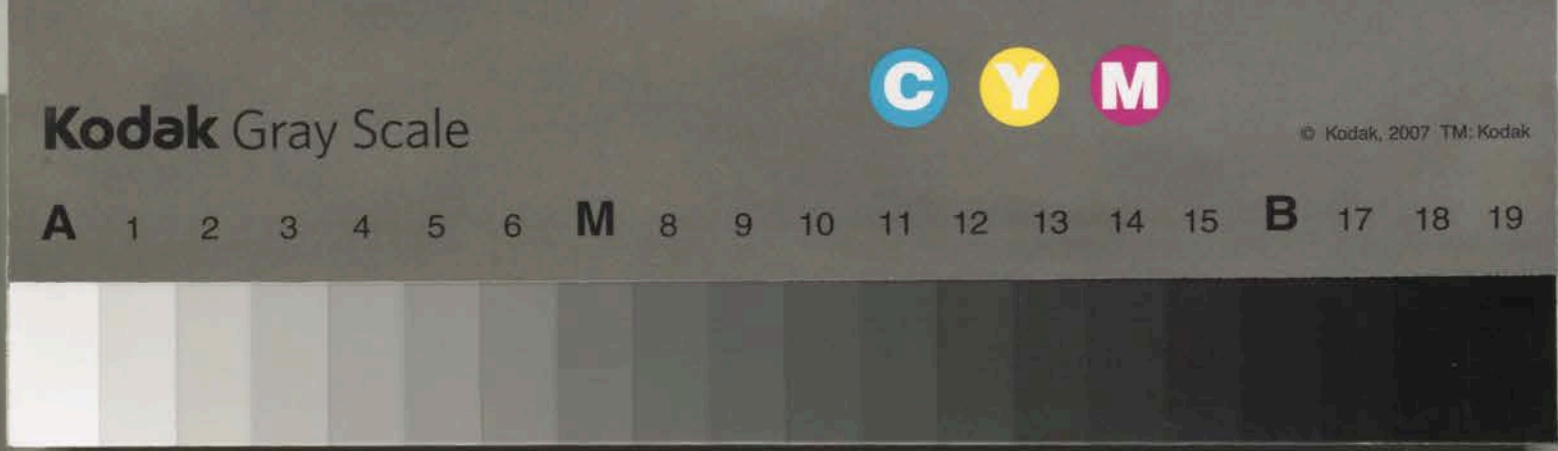
画夫もあはれしゆたのれ人  
 ろ如あはれしゆたのれ人  
 ろりあはれしゆたのれ人  
 をはれしゆたのれ人  
 吹の心乃いふしゆたのれ人  
 ちもあはれしゆたのれ人  
 燈をのれしゆたのれ人

押原推移録  
 〇序三

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





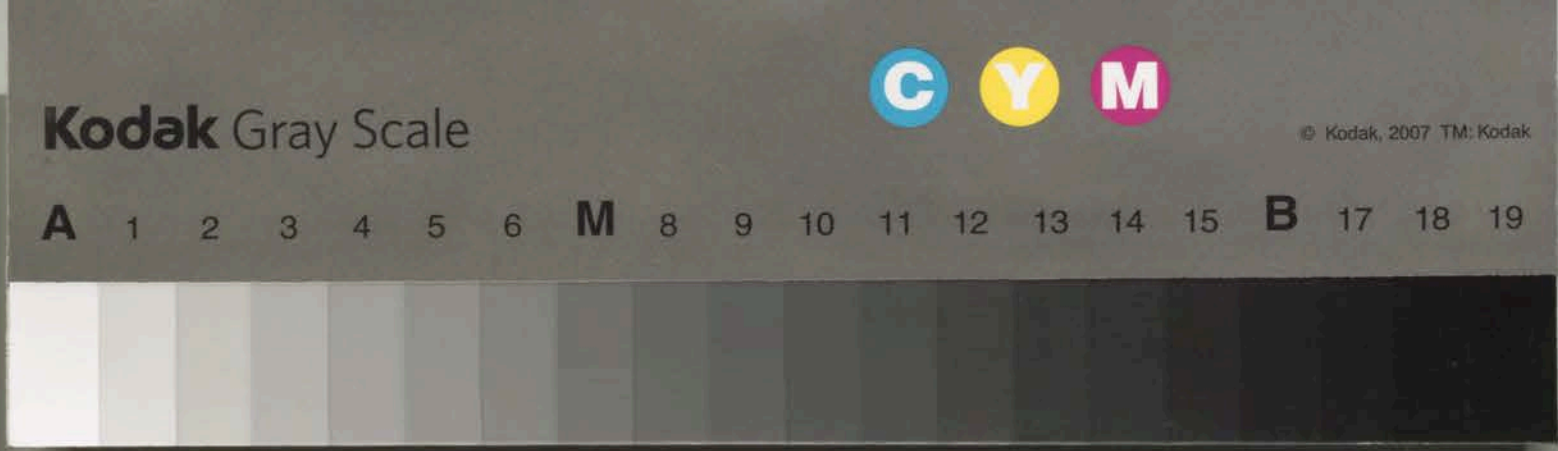
押し原推移録  
 〇序四  
 乃さしもつ子ほの中ぬあまのり  
 事ともあつたあし編り  
 扇もまれのさしほの女坂田の奥  
 近はもつたあし編り  
 斗はあつたあし編り  
 浅せるあし編り  
 十はあつたあし編り

とらひの舞いさしあつたあし編り  
 悔し思ひさしあつたあし編り  
 ぬ一身の天の戸に生れあつたあし編り  
 可杖あつたあし編り  
 るあつたあし編り  
 とあつたあし編り  
 う園のさしあつたあし編り

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





比里領を以て壬生の君に由緒  
 筭二荒の山に大神神也和  
 魂をこゝめ移して今宮の久  
 神と齋初奉りてまゐりし  
 橋の跡にまゐりしおのり  
 乃名にまゐりしおのり  
 傳はたは黒河のふたの  
 方お別して流れたるま  
 蘇の河原に石のまゐりし  
 おもふ程にまゐりし  
 中子原ゆゑまゐりし

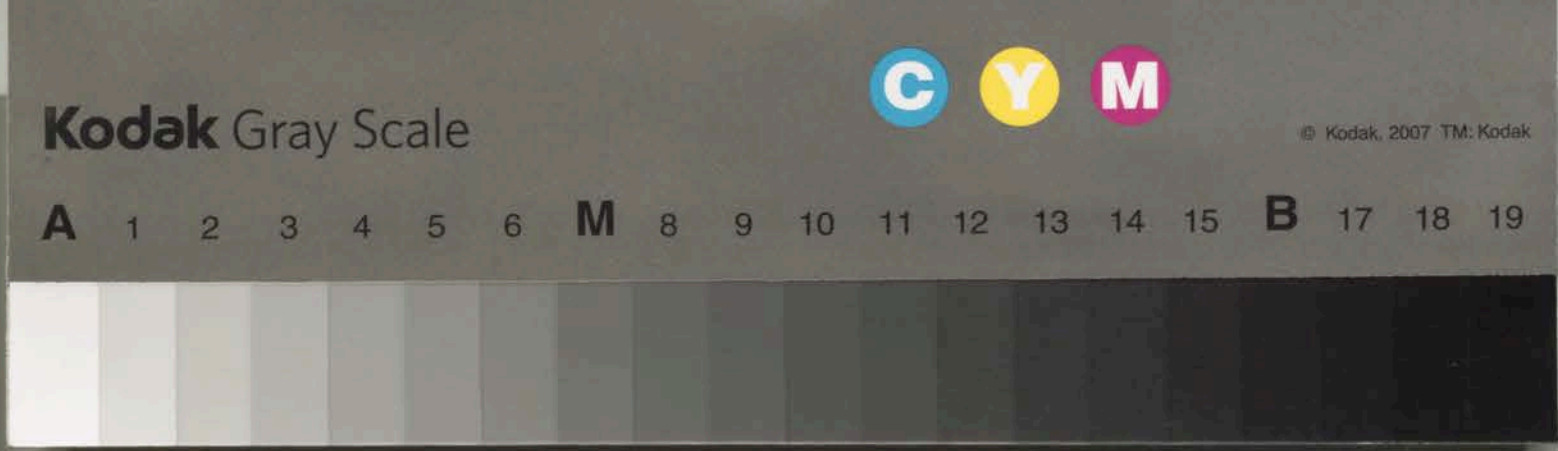
押原推移録

○序五

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





向合せに信綱の考後始る  
 をも正一又二里の石井口碑一  
 跡を遺るに母を後心と川  
 ふたつはとわらふに事と三  
 能心と書かす一の名号と押  
 原推移録といふかといふを  
 宮の大徳神に申すといふに

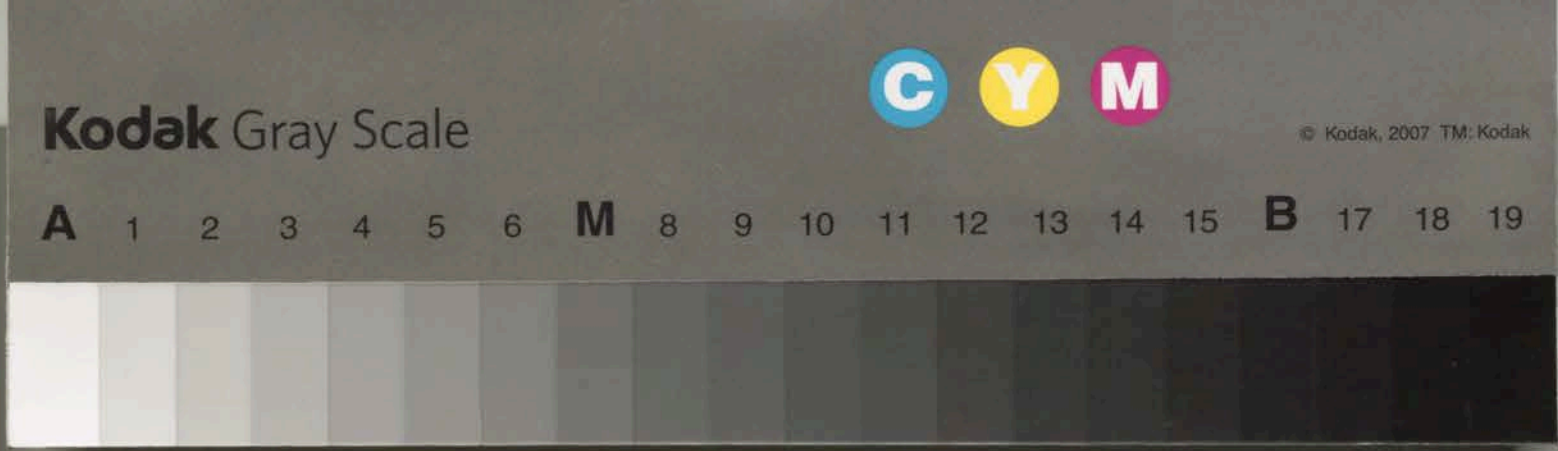
始て婦の事城の跡通今この事  
 と母跡を遺るに母を後心と川  
 跡を遺るに母を後心と川  
 何久しとて母を後心と川  
 尔志を遺るに母を後心と川  
 是を遺るに母を後心と川  
 とて

押原推移録  
 〇序六

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





押原推移録上ノ巻



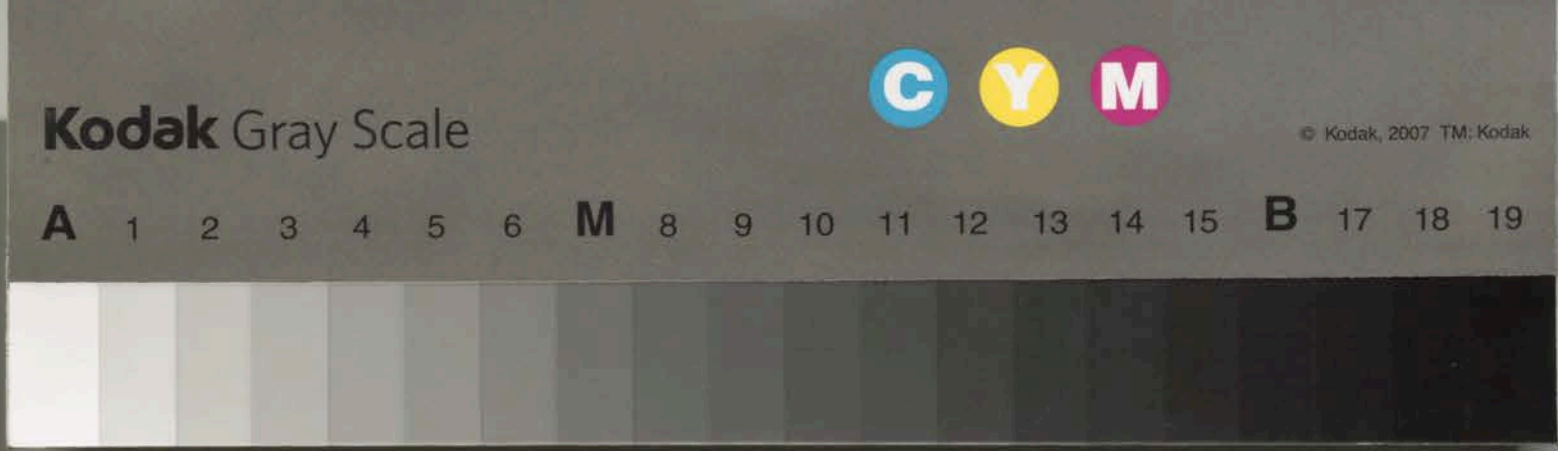
文政九之廿丙戌  
年乃文月  
山口安良  
門人  
溪野積方書

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1



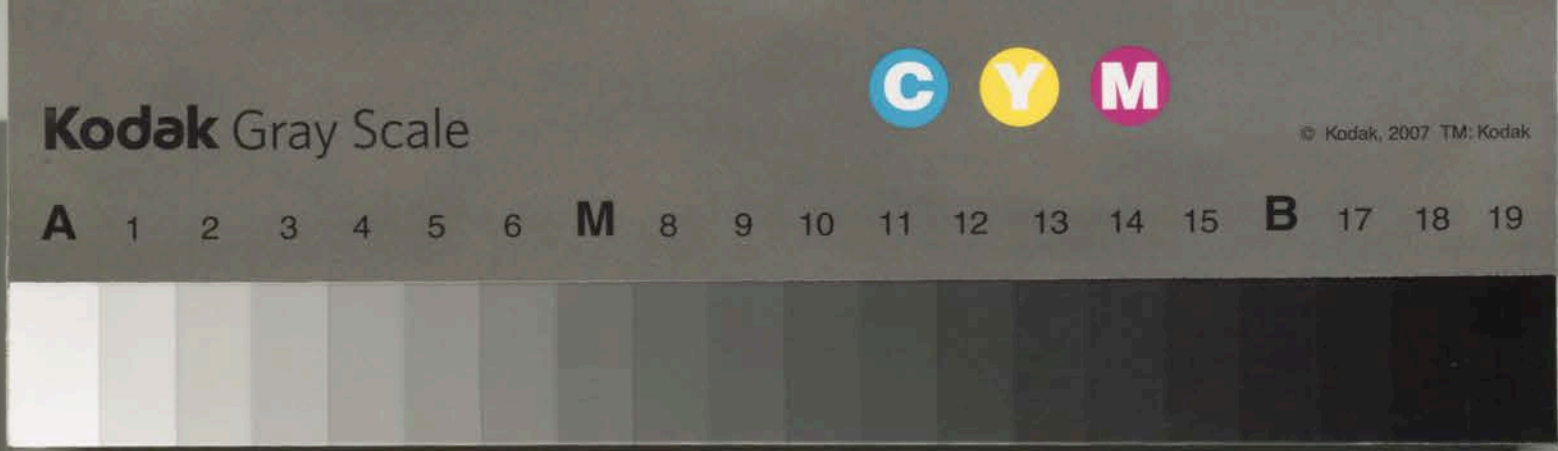




142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





押原推移録惣目録

上之巻

一 鹿沼宿 家数 町数 人別高

一 同古城器全縮圖

一 同古城跡御巡見略記

一 徳古鹿沼領地考

一 鹿沼城要害

一 壬生家系譜略

一 鹿沼右衛門之考

押原推移録工ノ巻目録

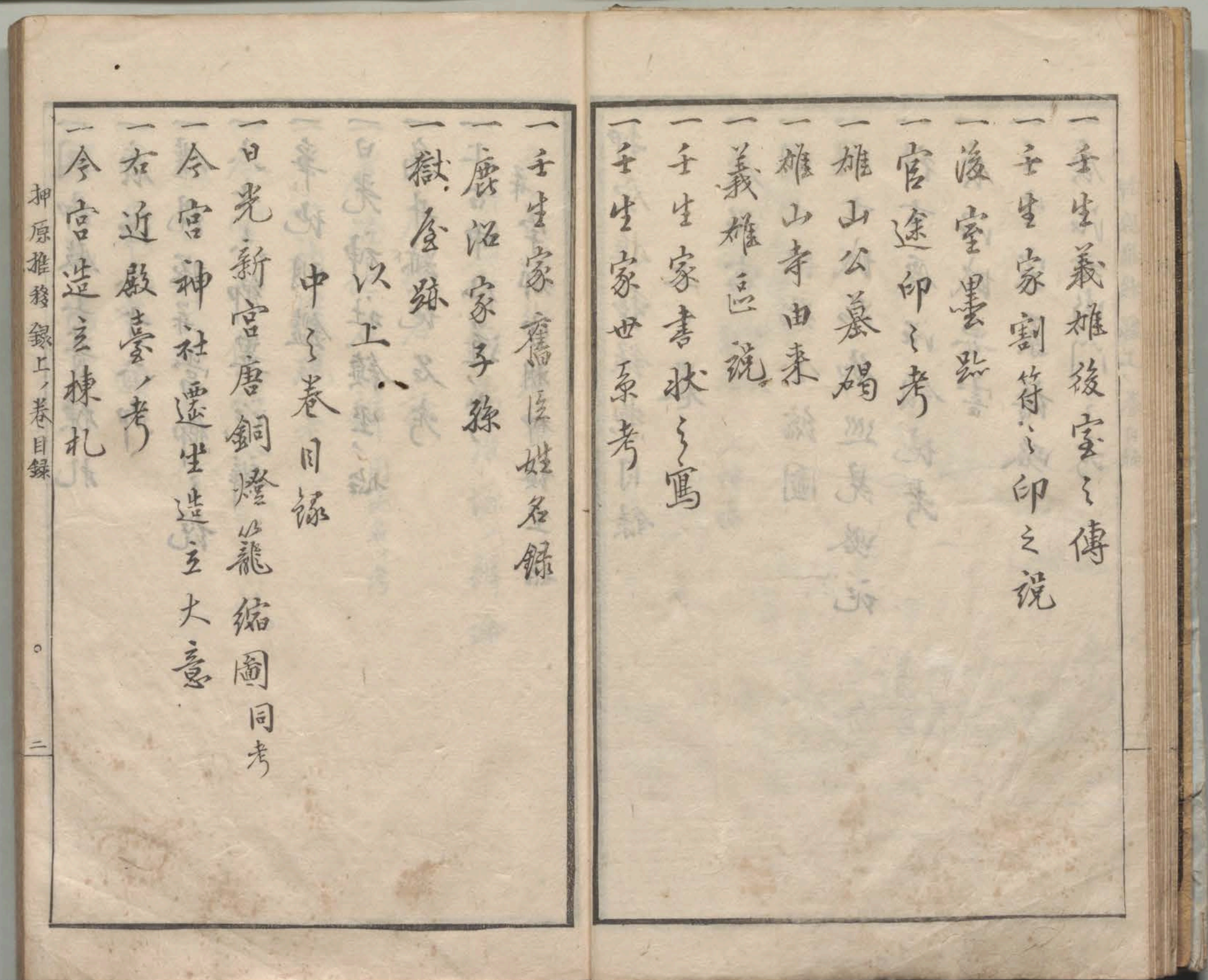
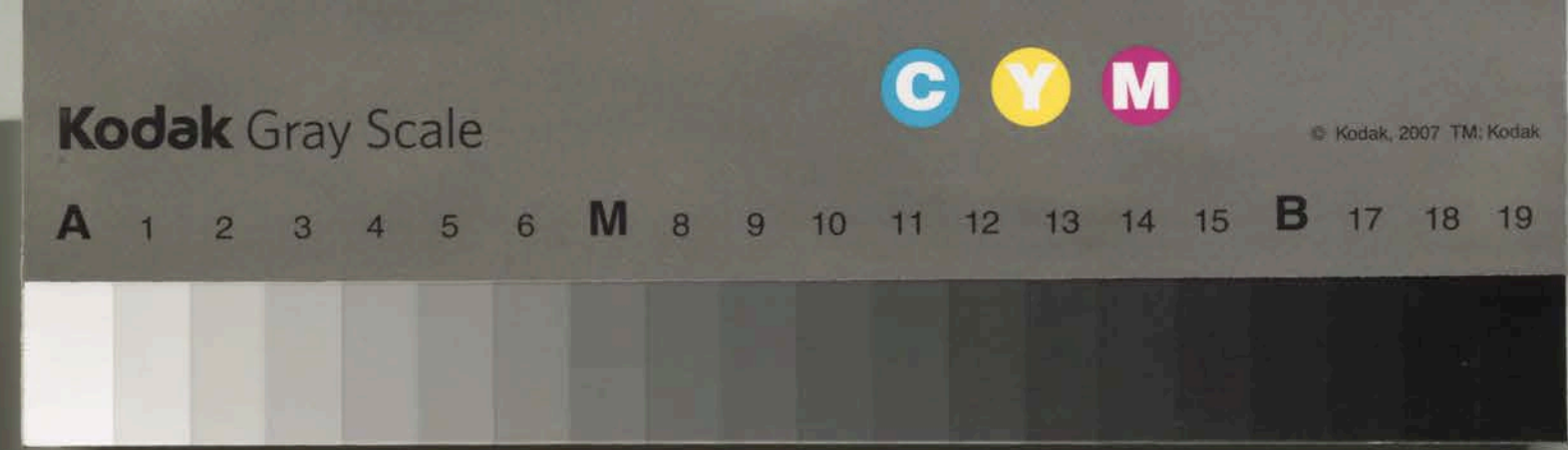
押原推移録  
鹿沼宿



142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





押原推翁録上ノ卷目錄

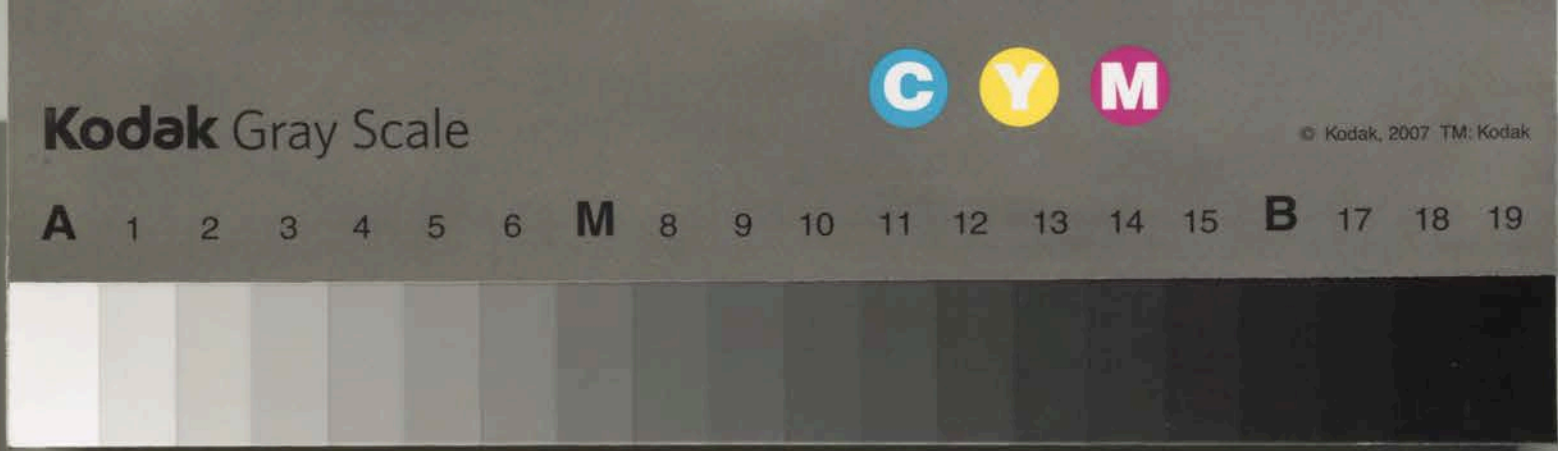
一壬生家舊臣姓名録  
 一鹿沼家子孫  
 一獄全録  
 一以上  
 一山中ノ卷目錄  
 一日光新宮唐銅燈山籠縮圖同考  
 一今宮神社遷坐造立大意  
 一右近殿臺ノ考  
 一今宮造立棟札

一壬生義雄後室ノ傳  
 一壬生家割符ノ印之説  
 一後室墨點  
 一官途印ノ考  
 一雄山公墓碣  
 一雄山寺由来  
 一義雄區説  
 一壬生家書狀ノ寫  
 一壬生家世系考

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





一古奥州街道考  
 一并判官塚攝治塚ノ辨論  
 一押原地名ノ話  
 一鹿沼地名ノ辨 同地名ノ考  
 一十二社權現考  
 一今宮神使佐太夫ノ古説  
 一今宮神社寶什  
 一同華表ノ額  
 一櫻ノ馬場

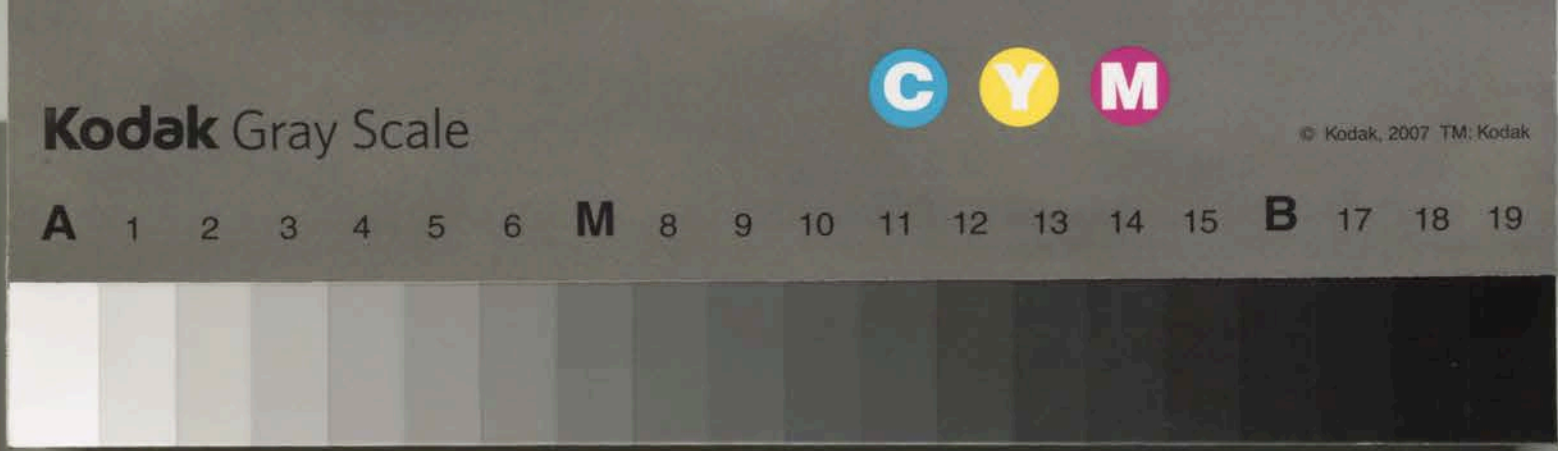
一同御殿上葺棟札  
 一鹿沼六十六郷  
 一權現塚并當郷ノ説  
 一六十六郷異説辨  
 一兼地明鑑  
 一日光神社鎮坐ノ始  
 一鳥井跡地名考  
 一上古中仙道ノ考  
 一并宇都宮明神鎮坐ノ始

押原推移録上ノ卷目錄  
 三

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





一今宮再建棟札  
 一同棟札  
 一權現曲輪考并町割ノ説  
 一今宮別所石燈籠由来  
 一宿助成金ノ始  
 一後宿  
 一代官番  
 一今宮祭禮ノ始  
 以上

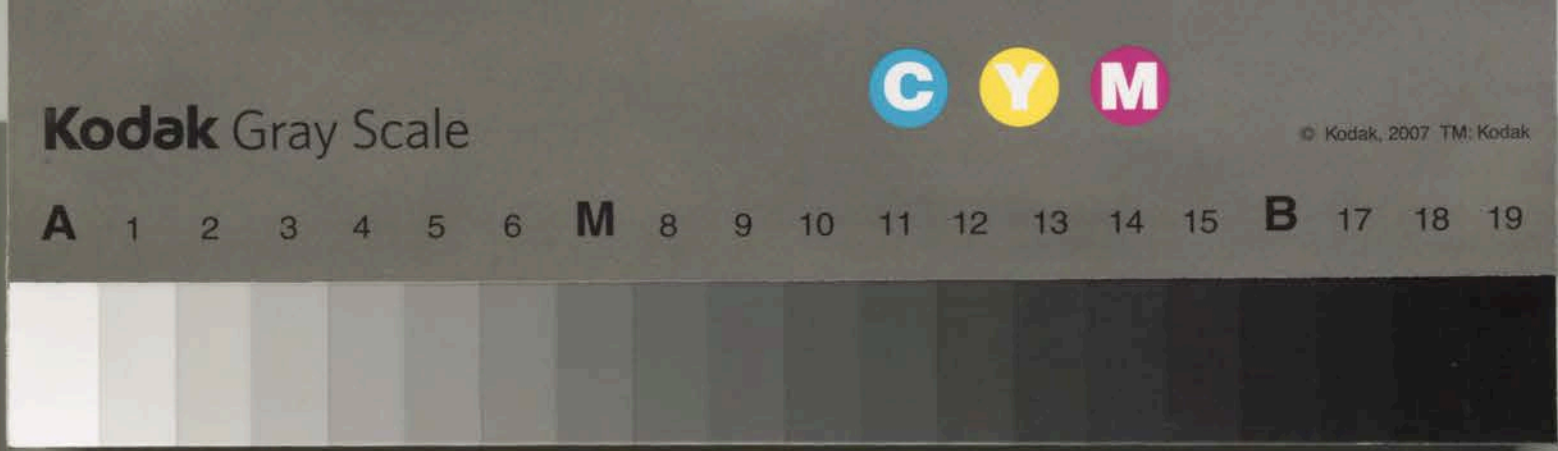
一慶長以來鹿沼東西町  
 一押原地子免高  
 一往還長并道幅 宿内堅括道法  
 一御朱印地并除地寺敷  
 一橋敷并黒川名義考  
 一御社参御用場  
 一片宿ノ説  
 一陣屋全補

下ノ卷目錄  
 押原推移録上ノ卷目錄

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





一初市規定書并見世割圖  
 一内町田市場争論大槩  
 一西光寺太鼓  
 一鹿沼麻同晒  
 一千万歳十万歳地名考  
 一鹿沼一番船考  
 一日光一番禪頂ノ説  
 一愛宕山ノ由来

一不二菴地名考  
 一藤房郷遺物塔并古鏡ノ圖  
 一紫雲山千手觀世音畧傳  
 一東照宮渡御ノ記  
 一大猷院殿渡御ノ記  
 一慈眼大師傳記略

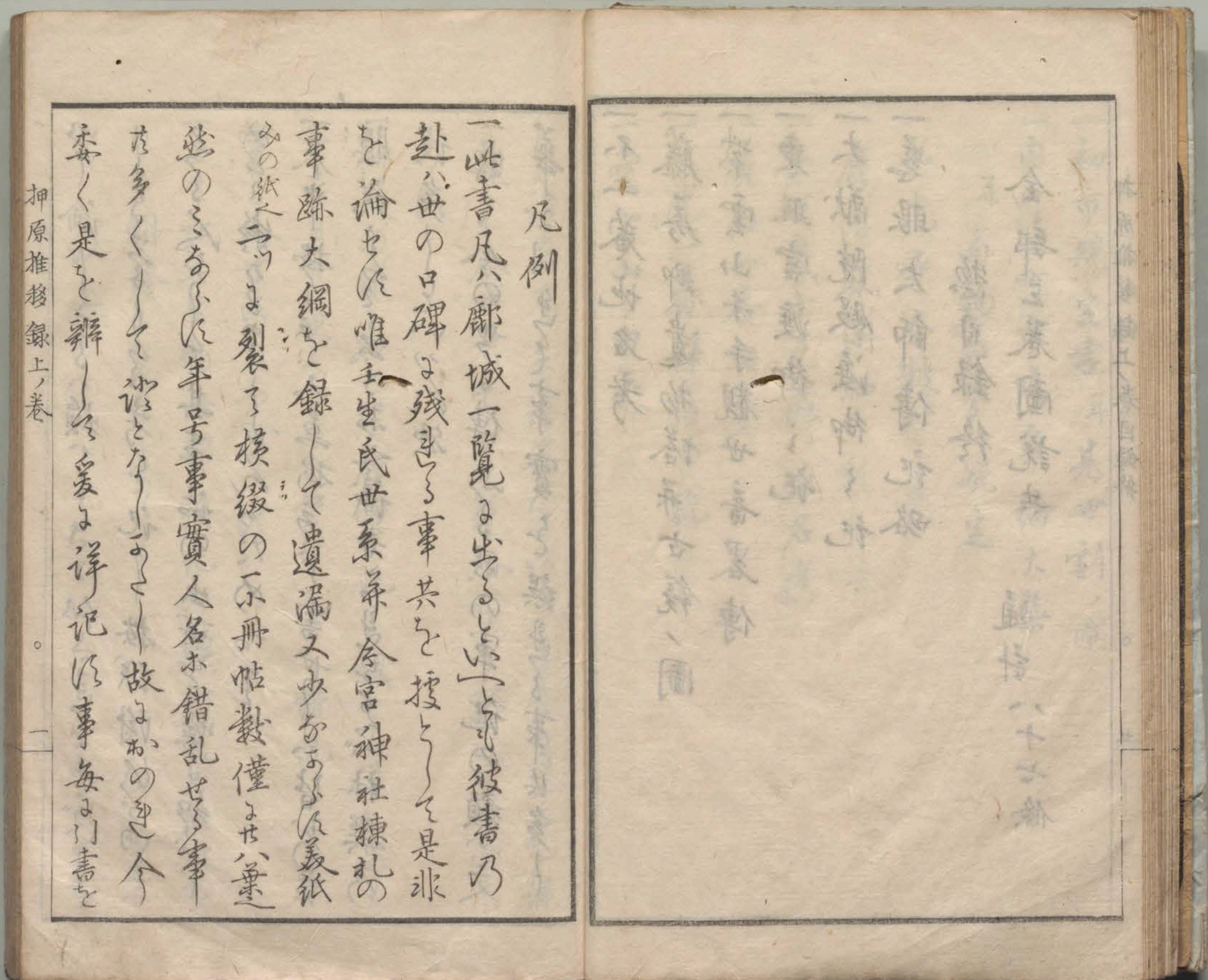
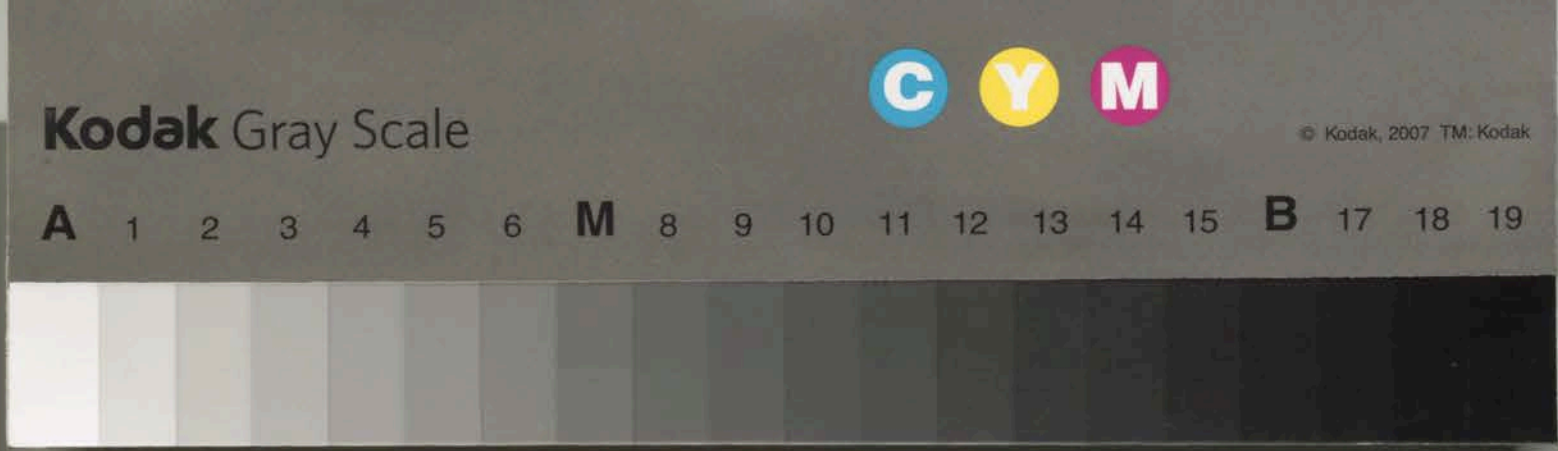
惣目錄終  
 全部三卷圖説共  
 通計八十七條

押原推移録上ノ卷目錄終

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





押原推移録上ノ巻

凡例

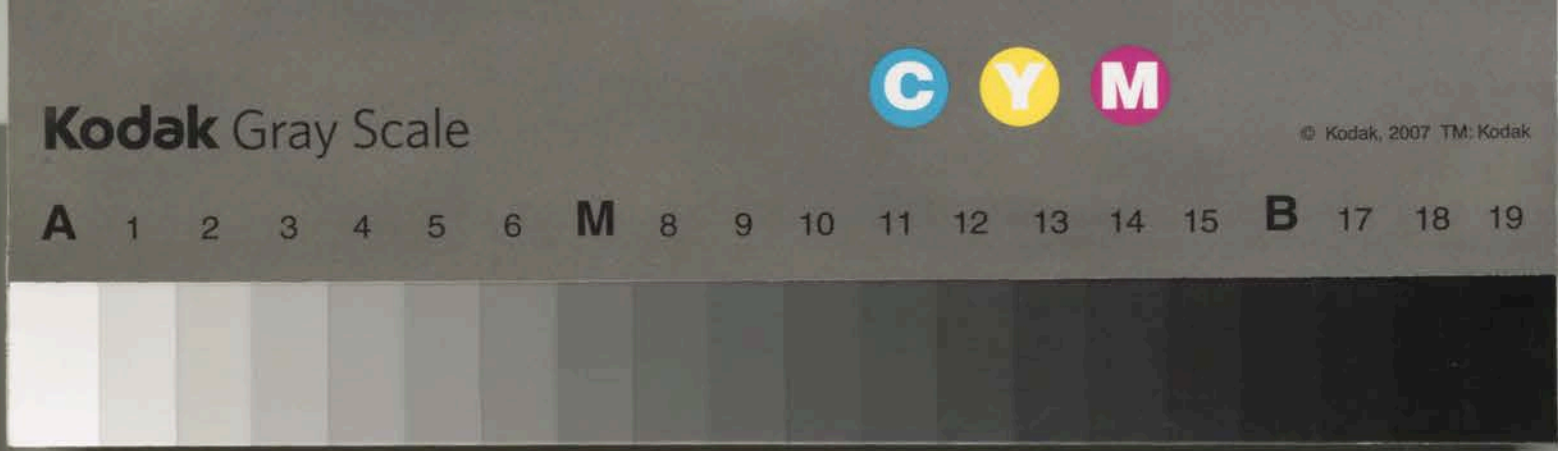
一此書凡ハ郡城一覽ニ出るといふも彼書乃  
赴ハ世ノ口碑ニ残事共ヲ搜とて是非  
を論とん唯壬生氏世系并今宮神社棟札の  
事跡大綱を録して遺漏又少あるは紙  
の狭ニツリ裂テ横綴ヨコヅミの一冊帖敷テシ僅ミ廿八葉  
然のちあるは年号事實人名亦錯乱せる事  
亦多くして誤とありあり故に其の趣今  
委く是を辨し其爰に詳記以事毎に書

金時三春園路共大鱗長八十六  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記  
一遺蹟大略記

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





以て論ずるは煩はしきと云ふは似てまじと予がいふ  
 一巻中按ふ云々又五按ふと書せしハ皆其の違  
 臆祝を以て出づる之識者こそ思ふに杜撰の  
 説多しといふん歎  
 一惣今この世に傳ふる所の軍記の類ハ文  
 華に引きて事實を誤りたる事共多し  
 一諸家乃系譜等を以て年月日を詳  
 々照し合せ考て其符合せし處を以て正  
 とす  
 一何人の作也宇鹿軍記と題せる偽出ある  
 年月日ハ更なる人名等悉く錯乱し其  
 實を合せ用ふべし  
 一壬生記壬生物語那須記の類何事も取捨あ  
 りて明證とハあし  
 以上

押原推移録上ノ巻

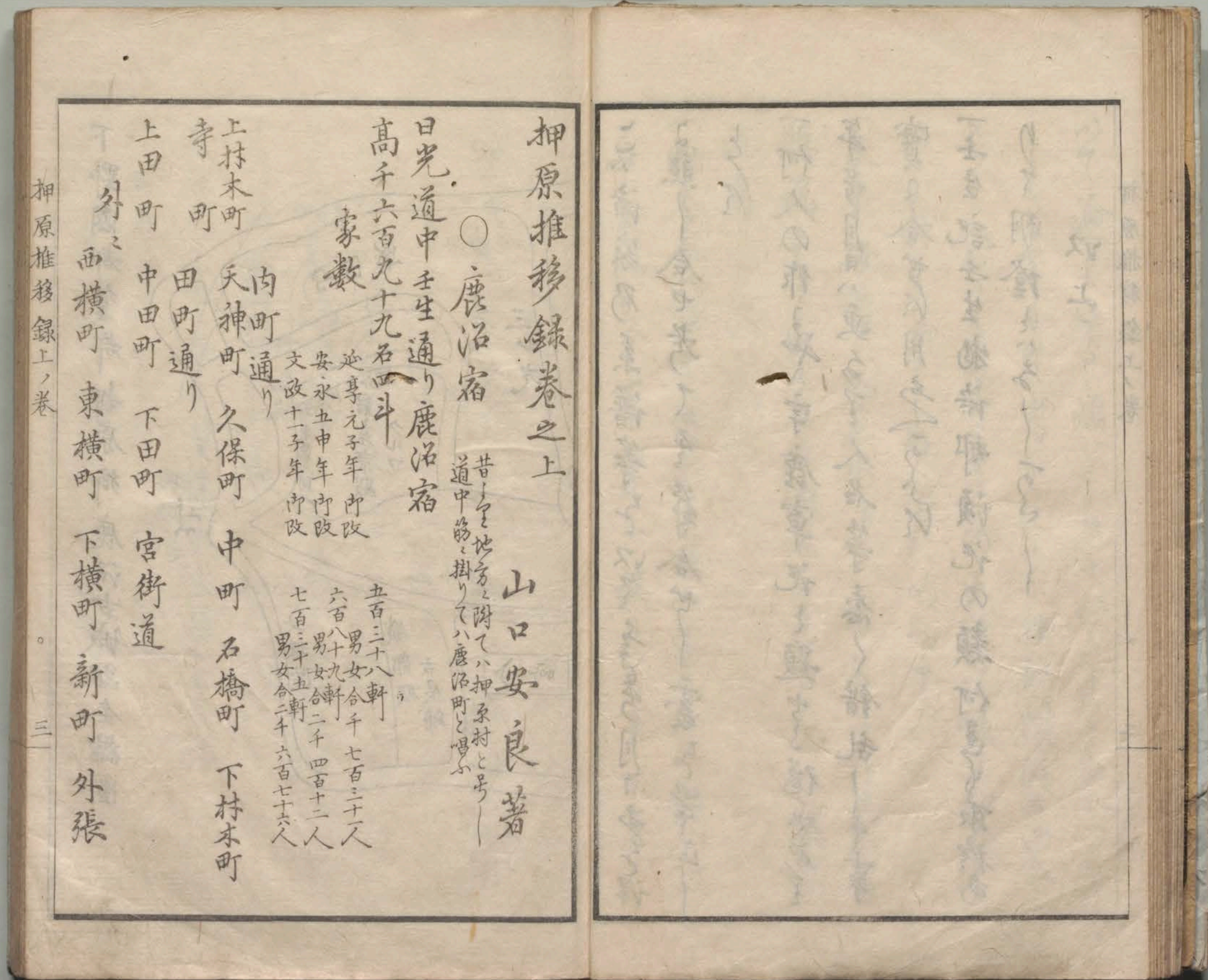
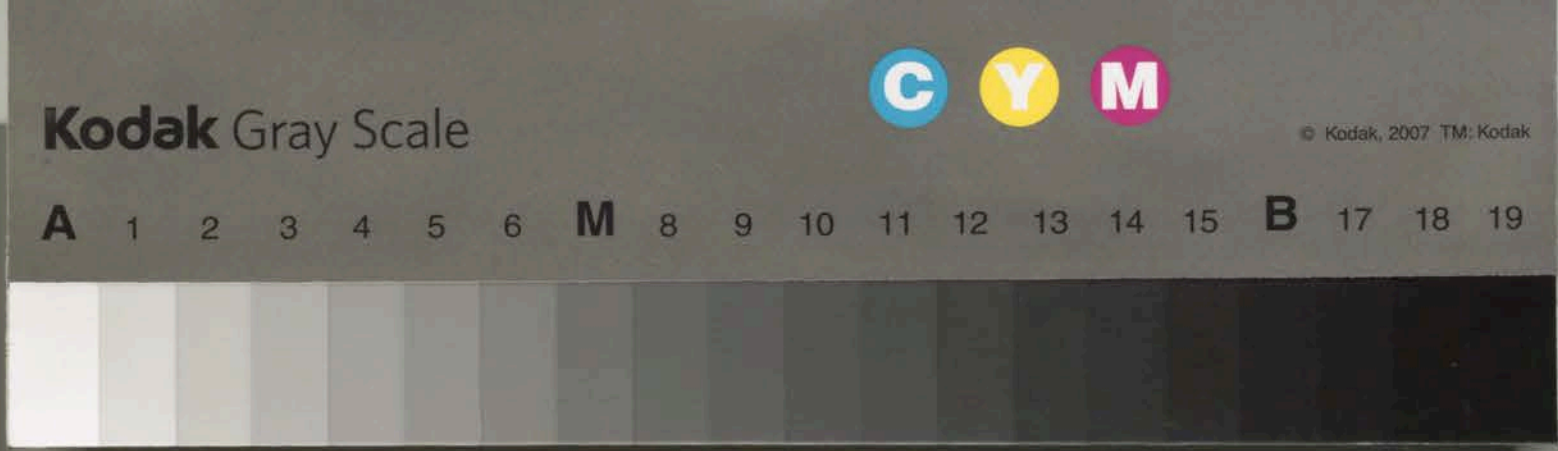
二

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1







押原推移録卷之上

○鹿沼宿

昔より地方に附てハ押原村と号シ  
道中筋に掛りてハ鹿沼宿と号ス

山口安良著

日光道中壬生通り鹿沼宿

高千六百九十九石四斗

家數

延享元子年内改  
安永五申年内改  
文政十子年内改

五百二十八軒  
男女合千七百三十二人  
六百八十九軒  
男女合二千四百三十二人  
七百三十五軒  
男女合二千六百七十六人

上林木所  
寺  
上田町  
外  
西横町  
東横町  
下横町  
新町  
外張

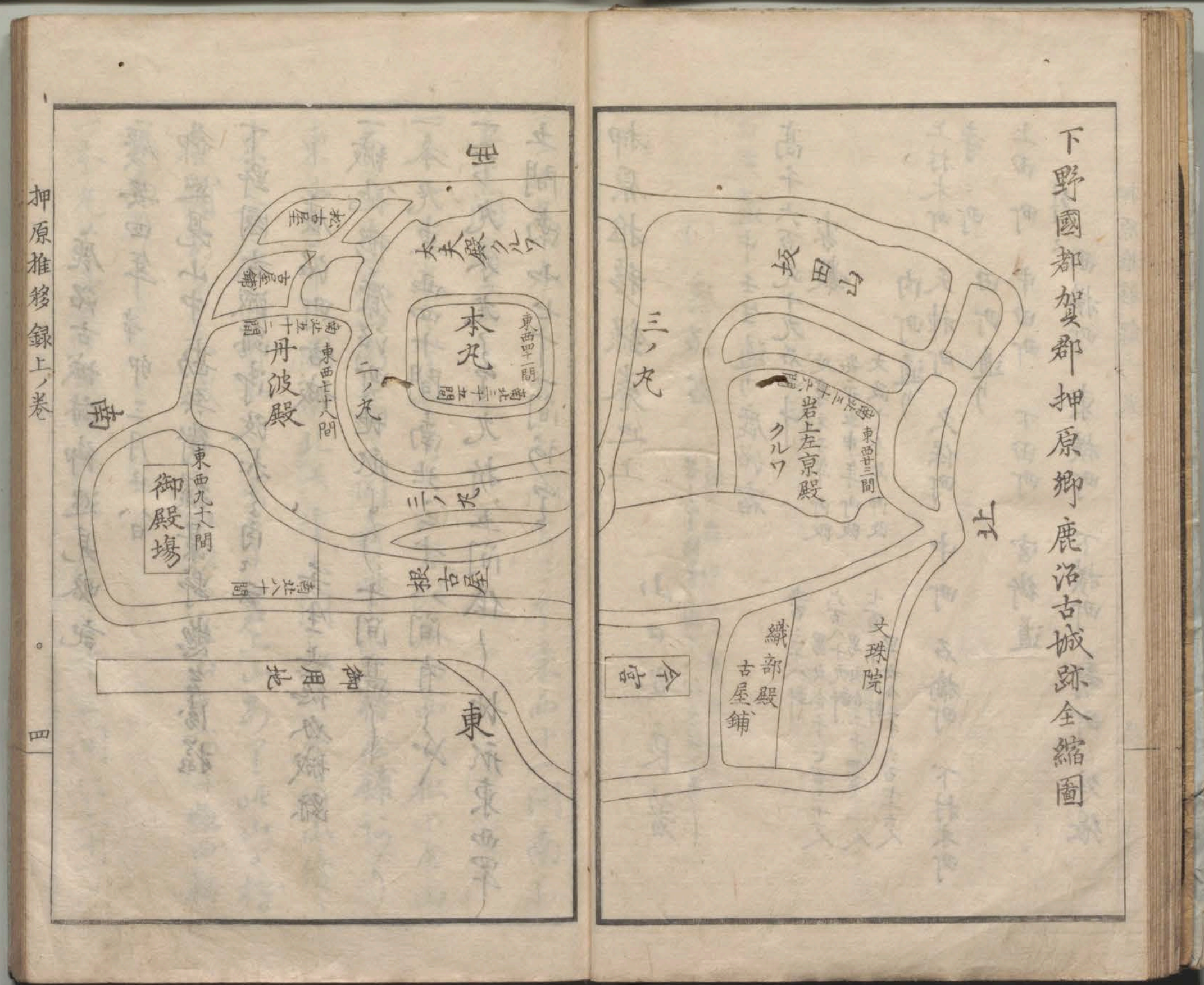
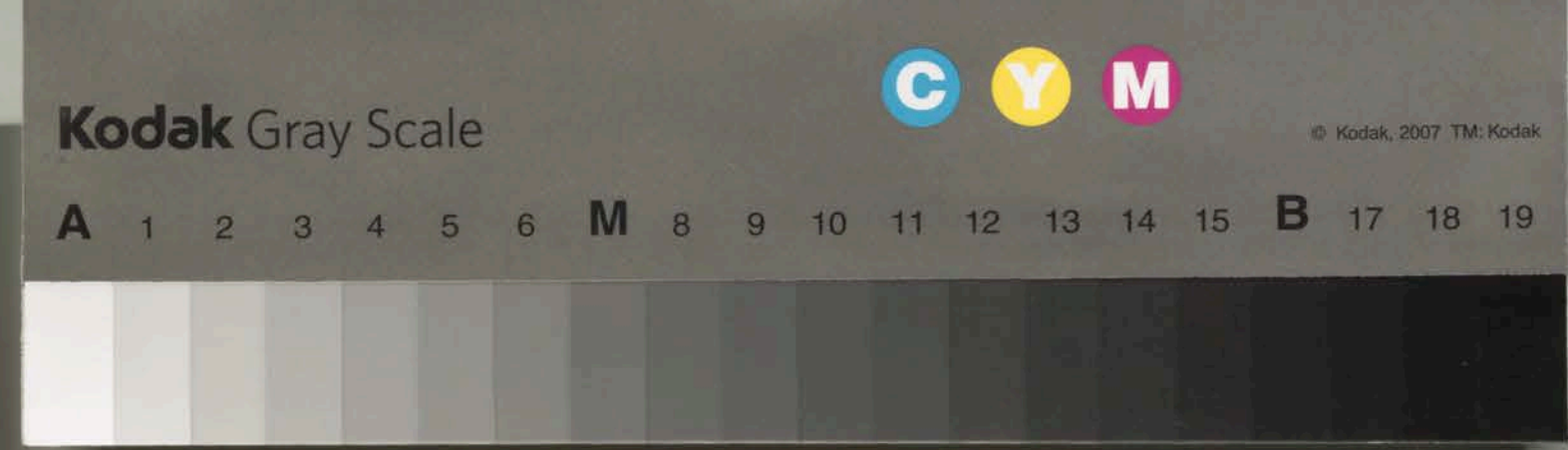
押原推移録上ノ卷

三

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





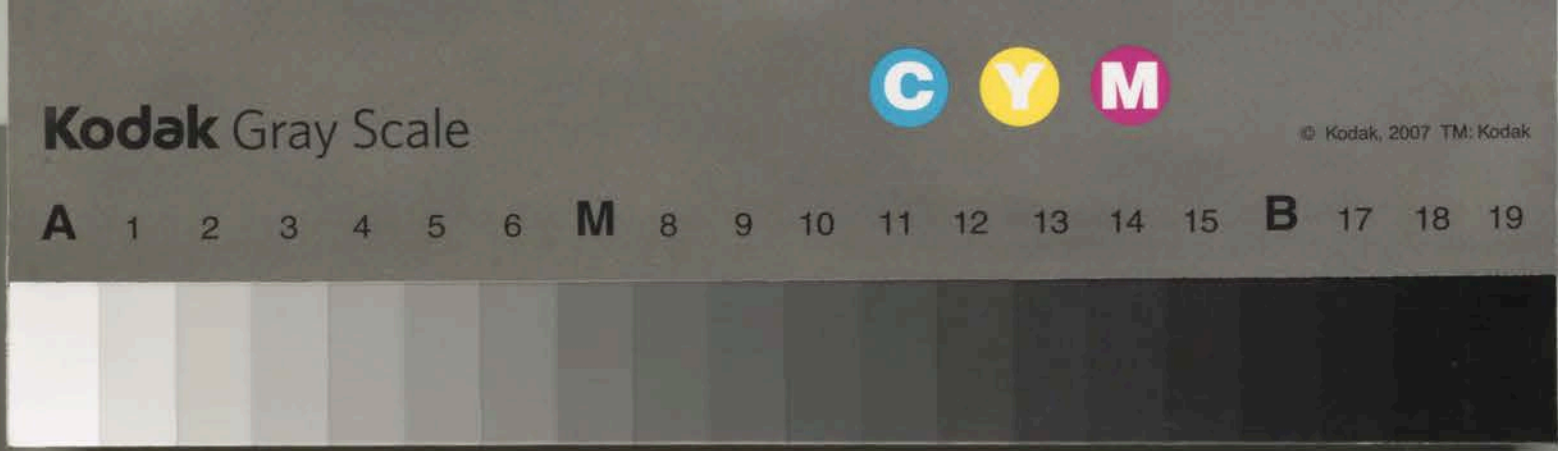
押原推移録上ノ巻

下野國都賀郡押原郷鹿沼古城跡全縮圖

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





鹿沼古城跡御巡見略記

慶安四年 辛卯三月廿八日  
御巡見山中 勘兵衛様 景野惣々傍様  
下野國古城跡市改扣之内云

鹿沼町古城

壬生上徳女城跡

一城地形鹿沼町地取より十間高  
一本丸東西四十間南北三十八間有也  
一二ノ丸本丸より九折五間低し地形東西半  
五間南北七十一間有也

一三ノ丸本丸より七間下りて東西十一間南北  
五十間有也  
一本二ノ丸より方細谷此谷北西に松小屋山  
あり本丸山の高さ同前此上に櫓屋鋪あり  
東西三十六間南北三十六間松小屋の山續き  
東方鹿沼町の方出りて岩上山あり此山は櫓  
屋鋪あり本城岩上山松小屋山と一なり惣々輪  
堀あり

一本丸分西の方小回地形より三十三間に二十間

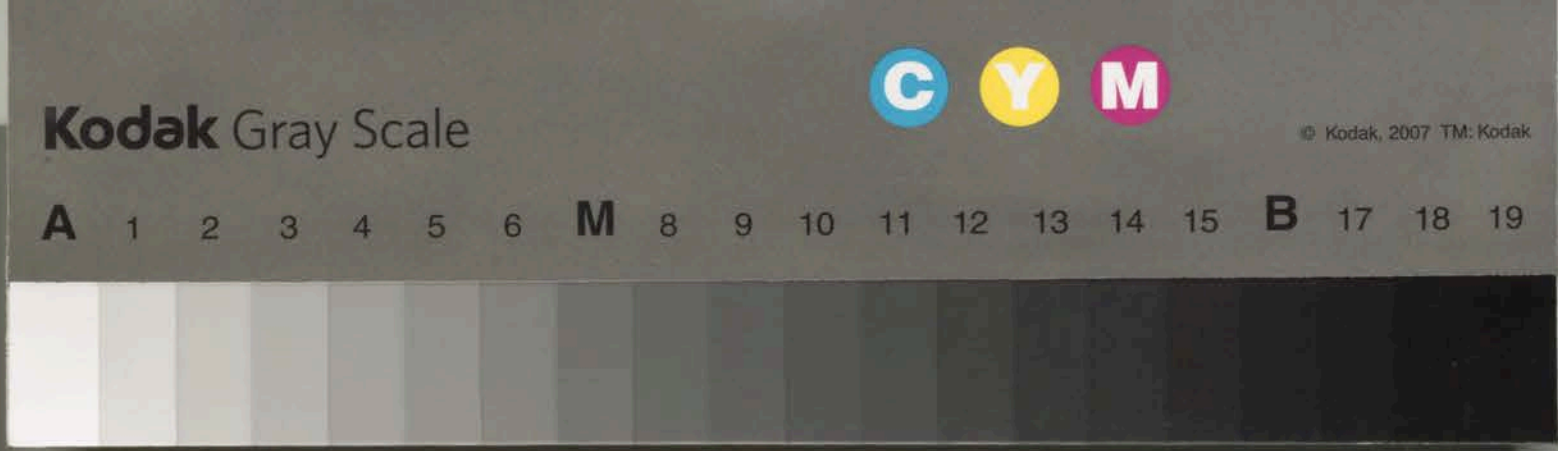
押原推移録上ノ巻

五

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





九阿多堀廣廿七間深廿五間高堀也  
 一右ノ丸之々四間九折西ノ方之三十六間十九間  
 丸あり此全鋪下八田也但之西鹿沼村ノ内也  
 一本丸堀之々南ノ地形次第下りや  
 一堀小屋東ノ方ノ堀權現前より南所殿の大  
 手口ノ角迄百六十六間所殿大手口ノ角  
 迄廿間あり  
 一所殿ノ地形東西九十五間南北八十二間堀口ハ  
 七間也

一所殿 所堀之々鹿沼所通り迄五十六間あり  
 一城惣構ノ内所殿ノ外ハ全全鋪侍全鋪也  
 一右ノ堀二三ノ丸の分竹木山に成得南次第下り  
 平地松木屋山岩上山雜木山西ノ谷ハ田之成り西鹿  
 沼村也

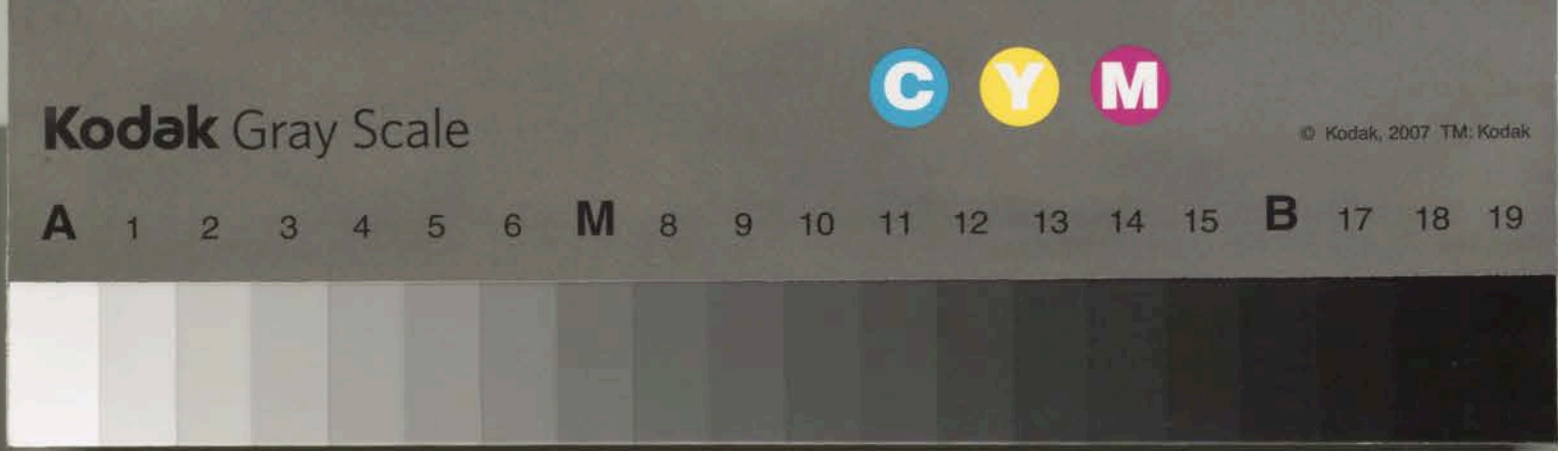
以上

往古鹿沼領地考  
 壬生物語云鹿沼の城以管する處南ハ大宮御  
 小八日光芝尾高原塩系東ハ宇都宮ノ隣也

押原推移録上ノ卷

六



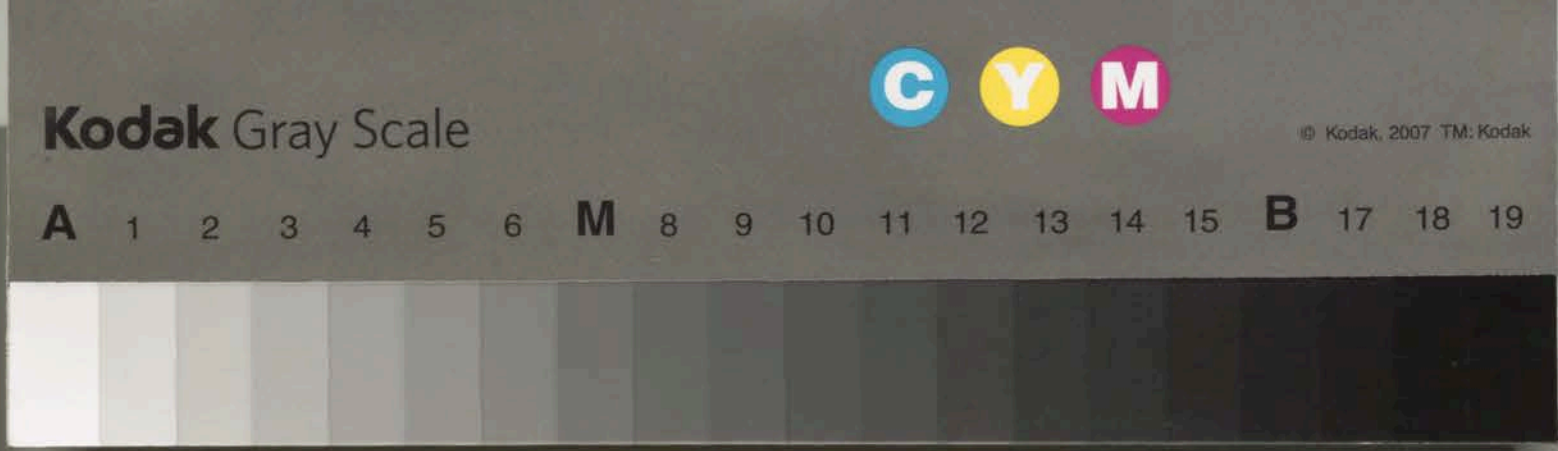


西八佐野に接し凡高十八万石餘  
 板橋出城守將 板橋將監 近棟  
 魔下城 羽生田出城守將 藤倉助  
 藤井出城守將 大垣石衛門兵衛  
 関八州古戦録云綱房数度の武切よりて  
 南八宮村小足尾高系迄迄取勢しそ万  
 貫餘の分限としそ魔下は屬しそ勇士數多  
 ありそ傍近隣を轟波とそ  
 五揚子甲斐國名勝志一巻ノ藤原元克云  
 天正年中毛利氏拾地の頃迄ハ一步を一文と  
 一畝を三三文と一段を三百文と一所を  
 三貫文とい信濃國伊奈郡北小河村なる  
 村木某の家は傳ふる等書に如是云云  
 采地の貫高は是より多義ありし可あり  
 さきハ綱房の采地一万貫ハ凡十萬石を考  
 ると一古戦録の説正しとす一は  
 次は委々辨じ  
 ○壬生氏世系考文翼子云壬生氏管内自佐野  
 押原推移録上ノ卷

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





至日光高原南二十里而遠其地大抵都賀郡也今閱世傳下野郡固所載都賀全郡田收二十万石而不足也且當義雄時有佐野皆川小山宇都宮諸鎮其附邑屬村大牙相錯乎都賀郡中由是觀之義雄十八万石地大可疑

○愚按此論最久聞之乎也且今試以是を辯する時、戦國の習ふ宇都宮家百万石杯と俗に稱せし壬生領も凡十八万石と唱へたるを論ずる時、都賀一郡三百二十八ヶ村を十五万石餘のこ又下野一國九郡を合しても十八万餘石ありや

○壬生常樂寺傳記に小山家領百万石結城家領百万石宇都宮家領百万石壬生領廿方石とありと我々の據るに記せし如く不審其荒涼杜撰論すは是れと童蒙の爲に爰に辯は茲以の住持聖山といふ僧乃作ありと我

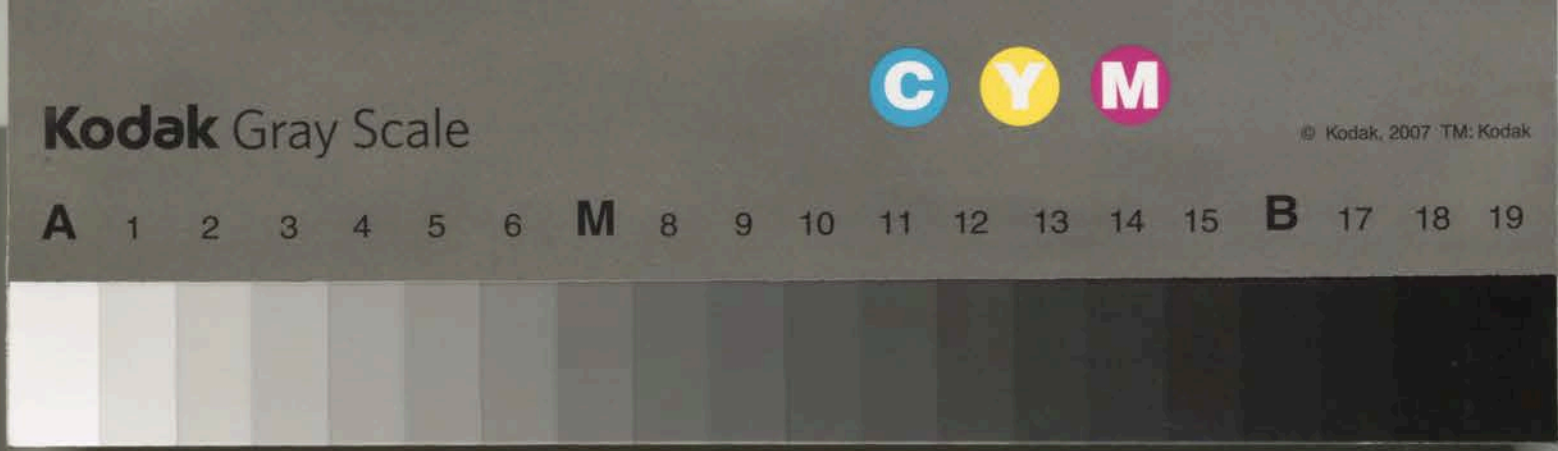
押原推移録上、卷

八

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





鹿沼城要害

皆川山中録云柳鹿沼押原の城ハ西方に  
 西麓沼村とて左右に山を以て廻りて外を  
 地面一段低き村里ありて堅之十町計其横  
 十町餘乃西あり常に此所一夫芦川の水を以  
 て用水とて又城の要害とも用ひて此川の  
 末に掛つる橋を露取橋と云今の光太寺の前あり  
 此橋の左右ハ至り狭き所を以て此川水を堰留  
 りて其村里一面の湖水となりて水の深き所  
 限りを以て是れ裏手の要害とて又  
 道手ハ一ハりの黒川の水を堰入道内外城共  
 水漫々として舟も入る容易ハ渡る事  
 を云ふと云ふ以上摘要

此文よりして今古堰の地理を量り考ふる  
 に其虚文不非ざるを知らしむる人  
 猶よしと云ふ

壬生氏系譜畧

壬生筑後守 幼名彦五郎

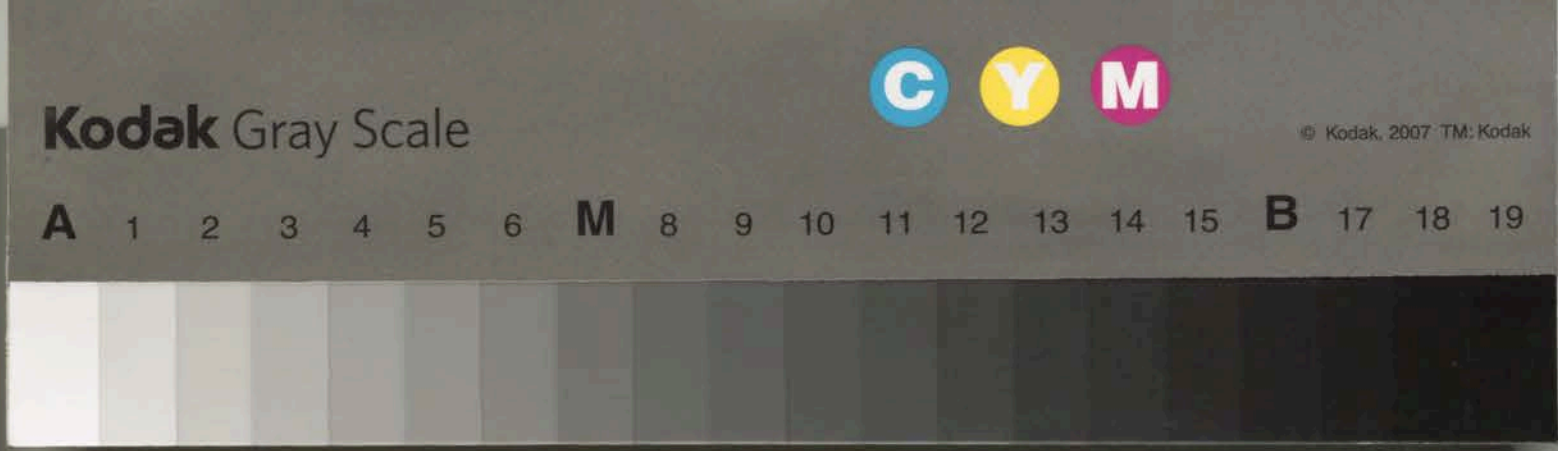
押原推移録上ノ巻

九

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





京都壬生氏庶子武家の屋にありて下野  
 國に下野壬生新町堀の内子城と築ク  
 實に寛正三年壬午の年壬生本姓小槻氏  
 を闕て壬生と号し○文明元年己丑碓氷  
 大明神の祠に達し城の鎮守として黒川  
 氏を以て祭主と定む

○天文二年乙丑卒に法名常樂寺殿前壬  
 生氏龜雲道鑑大居士壬生常樂寺碑碣  
 今存存

二代目  
 筑後守胤業

大永三年癸未卒に法名大微院殿拈蓋  
 東閣大居士父筑後守胤業  
 十九年卒

三代目  
 筑後守意安左門佐

大永三年始て鹿沼を領し天文元年壬辰  
 城を築地名字  
 坂田山龜城と号し此事事  
 委し海三子あり

長男下總守綱房二男日光座主坐禪院  
 昌膳阿闍梨後遷俗して久能村  
 二女一々殺す三男徳希齋後  
 兄綱房之威  
 殺す

年甲午當城の鎮守として此古大同年中

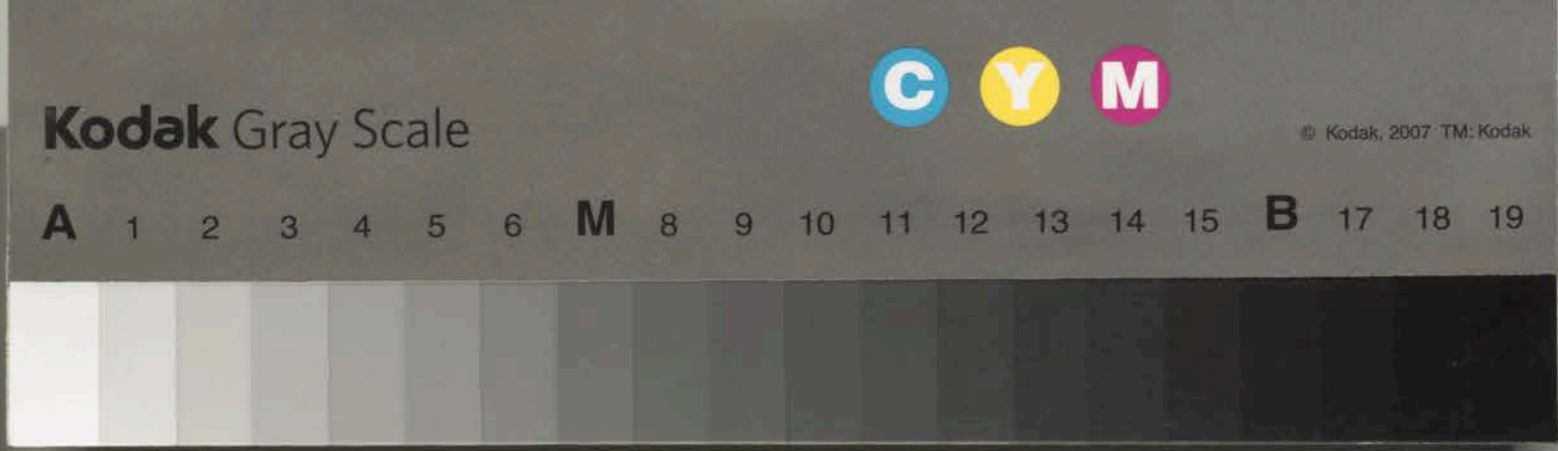
押原推移録工ノ卷

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1







日光山三社新宮本宮祭る神大己貴命 味耜高彥根命 田心姫命

神社當處字所石の小祠所森多玉田村通道東方之椿木多を以て土俗椿森と今の日

今宮大権現と稱し神領を寄附別所

神宮寺を建る弘治元年乙卯三月十七日

卒父胤業氏法名龍桂院殿雲山良祐大居士卒

後り廿一年

東園居士とあり父胤業の法名と錯乱せし

○今宮遷坐新造天文三年とあり當至文

政九年丙戌年數二百九十二年あり是は

未子委一〜〜〜辨一

五一將一子一壬一生一家一古一河一公一方一晴一氏一膝一下一乃

一將一之一室一古一戰一録一云一天文六年正月常

州小田左京太史政治多賀谷下總守

家重と心を合せし結城政朝を討ん

と政朝古河乃所所に加勢を乞ふ晴氏

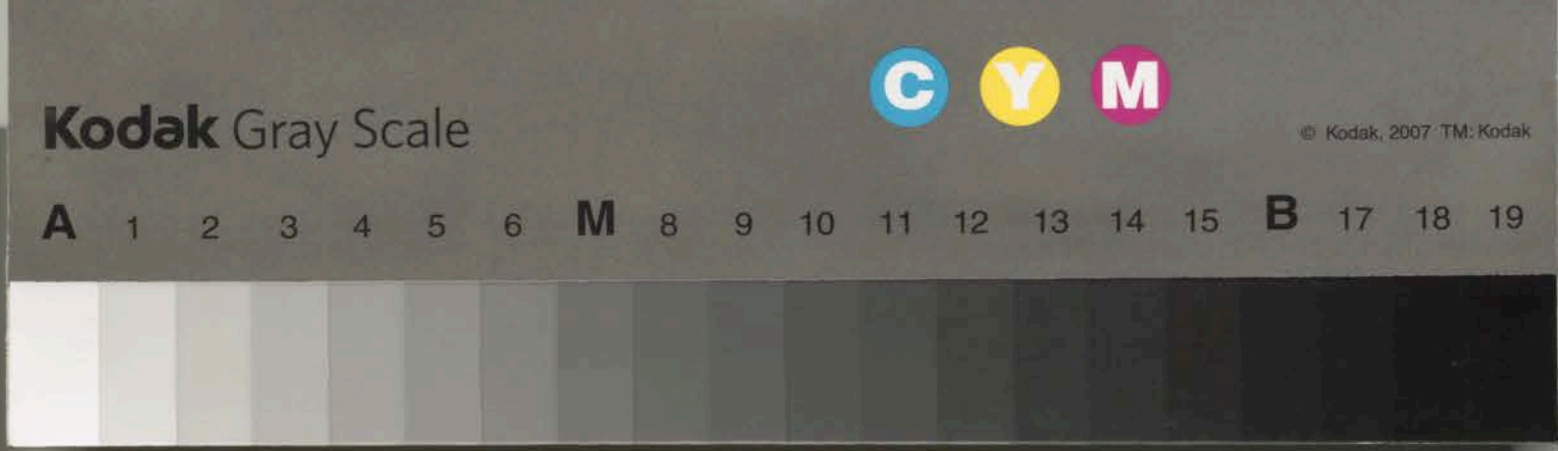
押原推移録上ノ卷

十二

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





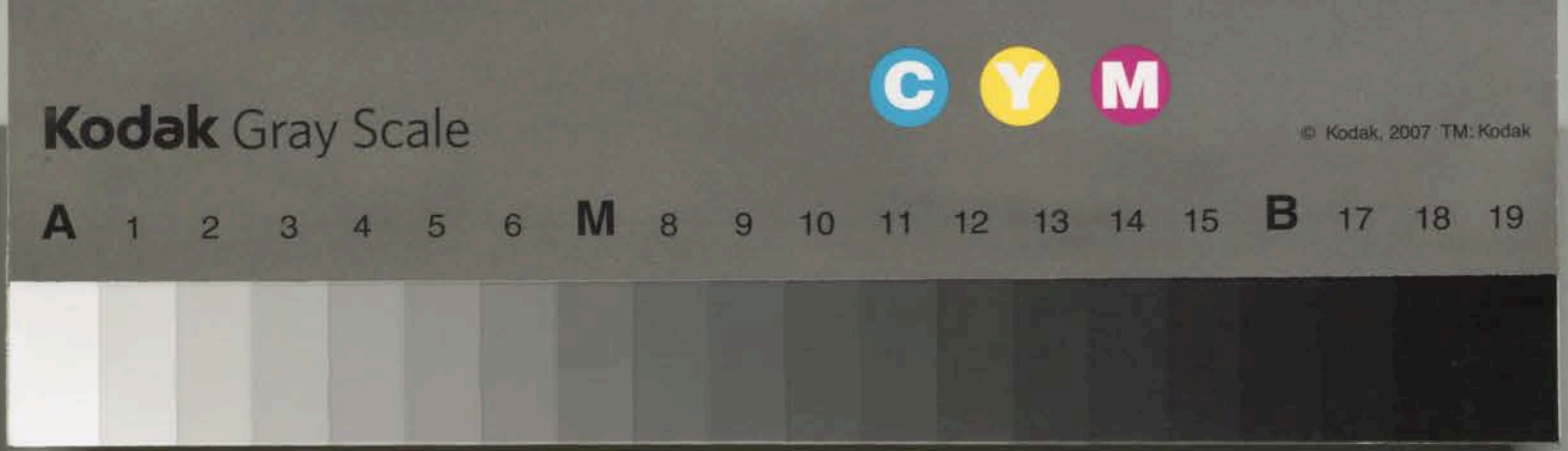
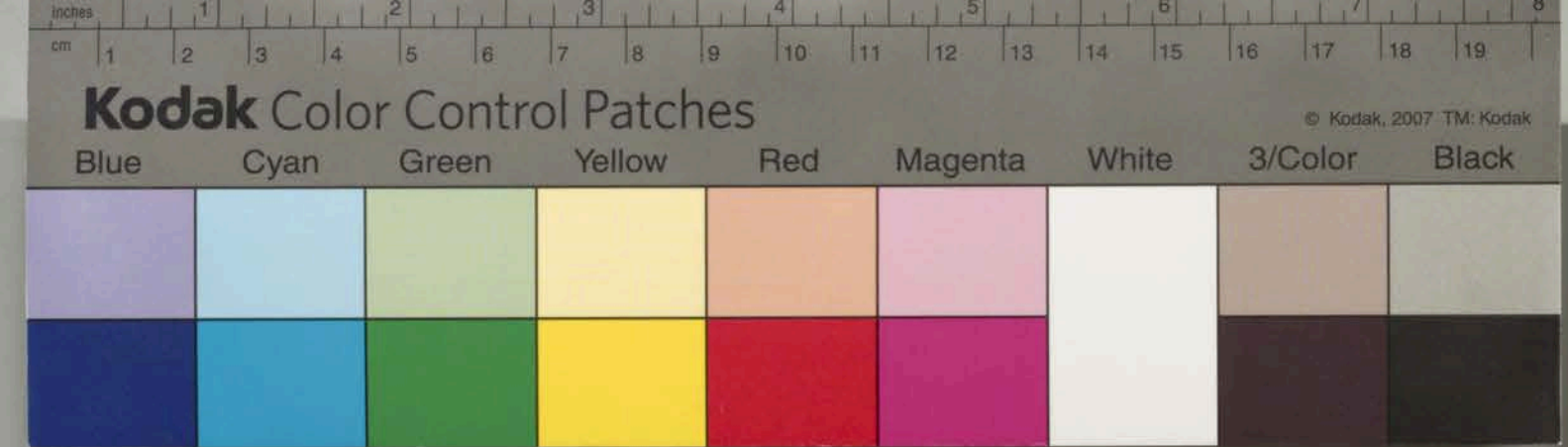
諸將を令して加勢せしむ其掣ふ小山  
 壬生巢田筒戸皆川一色木也政朝大に  
 悦ぶ云々  
 同書云天文廿三年十月小田京城を以奈  
 氏康不意に兵を發して古河公方  
 晴氏を襲ひ搦りて小田系を帰陣に  
 せん天文廿年六月關東の管領たる上杉  
 憲政も氏康のよめに上野平井の城  
 を没落して越後へ遁るも長尾景虎  
 を頼りて上杉の苗字を讓り關東  
 管領の職を譲る然のよめに永録  
 元年二月景虎京都將軍義輝公の  
 諱乃一字を賜りて輝虎と改名し  
 冥未征伐すも御書給りて又  
 入道して謙信と号し爰に於て威勢  
 強大なるを關東よ小田系武田上杉乃  
 三家鼎足の如くそげしあて彼を討  
 是を亡し地を廣うせんといふ外

押原推移録上ノ卷  
 十二

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1



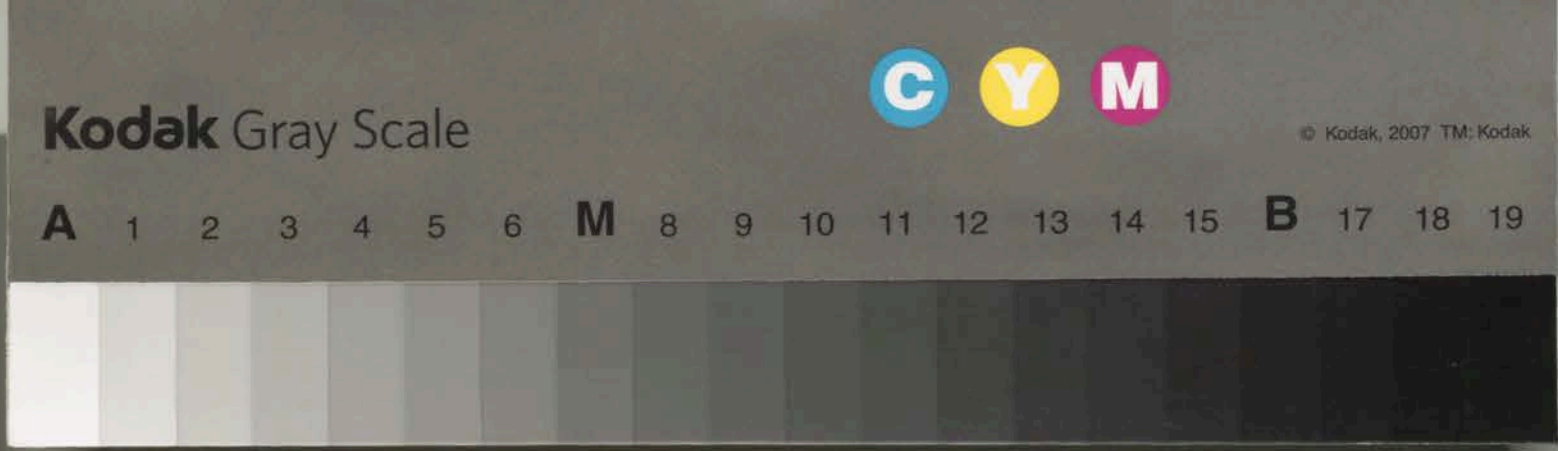


下野小山結城佐野足利皆川宇都  
 宮多切壬生真岡那須常陸子佐竹  
 小田真壁多賀谷の族上野西郡ハ  
 小幡白倉安中倉賀野の黨東郡ハ  
 大胡山上桐生沼田の族一城一郡ハ  
 割據して成敗を計り諸國の争  
 戦止時ありと云々  
 四代目 下総守 綱房  
 三子あり 嫡女 伊勢 龜 至按伊勢龜ハ綱房の子ハ  
非ハ系譜誤り也  
 二男上総 孫 氏勝 後義雄  
と改 二女ハ皆川山城守  
 廣照室 皆川二代目左京大夫  
隆康の寶母 意安卒して後二男義雄  
 をして壬生城を守らしめて之つゝ鹿沼  
 津に據る然るに弟徳節齋兄綱房を恨  
 事ありて天正四年丙子二月廿五日綱房天  
 神の祠前 今の大神町 小詣りて雲を窺  
 服心乃家来に命じて大杉の蔭より  
 射殺す 下沢村土葉山龍昌院  
惠光寺に葬る 綱房法名龍昌院  
 殿惠光芳指大居士 父意安卒して  
廿一年没す  
 押原推移録上ノ卷 十三

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1



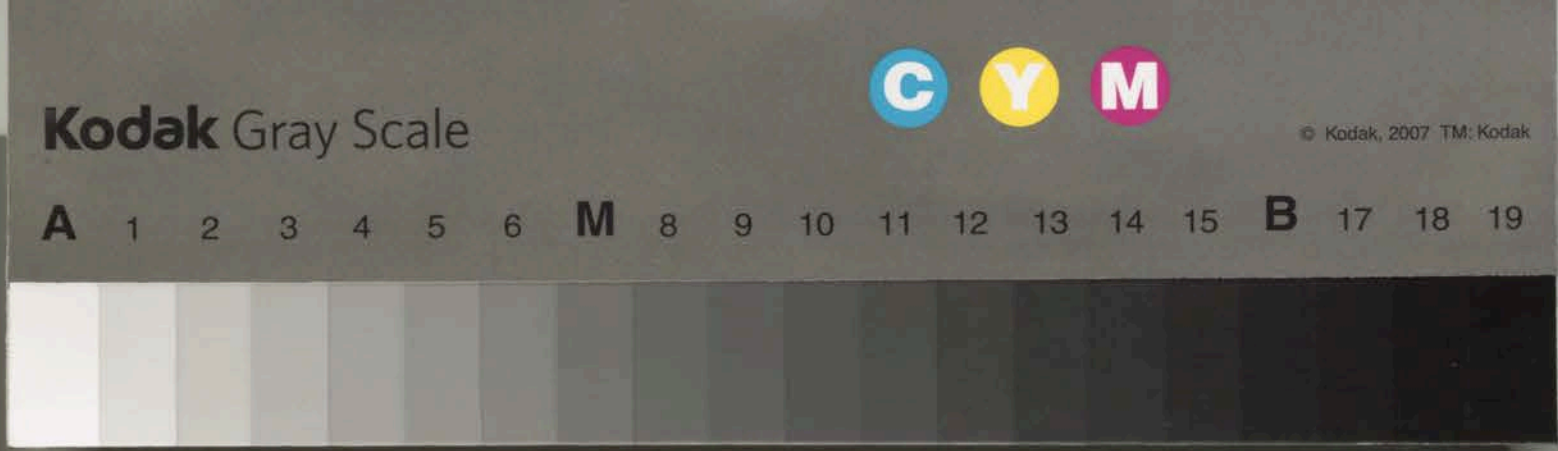


按此時徳前高り乱内多子壬生子葬事  
 事能ハ下澤村ハ葬リ  
 正中録云爰子宇都宮十八代下野守高綱  
或曰隆綱同書本那漢記ハ俊綱と作スハ隆綱也  
 一宇都宮系圖ハ俊綱といハクハ  
 按ハ宇都宮十八代目高綱といハクハ  
 又宇都宮系圖ハ俊綱といハクハ  
 之ハ大ニ誤述テ宇都十八代目ハ下野守  
 後四位下忠綱或隆綱ト作スといハクハ遠ク後廿  
 四代目ハ水戸公の御許小任セリ人也  
 又俊綱ハ廿代目ハ下野守後四位下  
 尚綱後左衛門佐小任ハ俊綱と改む  
 天文十八年那漢ト戦死シ○又古戦録  
 ハ十八代石馬權頭尚綱或俊綱トあり  
 又十八代目忠綱を誤述ス之討死シ天正  
 十五年トあり誤リ也系圖を以テ  
 正中録云綱房宇都宮ハ屬トナリ那漢川井の  
 押原推移録上ノ卷  
 十五

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





城主川井出雲守兄弟を攻む綱房謀を  
 廻して川井を烏山の株に追走し  
 めて城を陥る高綱尚綱の誤りあり切を賞して  
 千度の郷を綱房に與ふ以上摘要  
 壬生物活云々國綱切を賞して綱房に  
 師今茂吉小千度の二郷を與ふ又云壬生氏  
 乃宇都宮に服役する事君臣の如し云々  
 ○廊城一覽云々壬生物活の文を以て見事  
 綱房の綱の字ハ國綱の一字成貫ハとの  
 歟

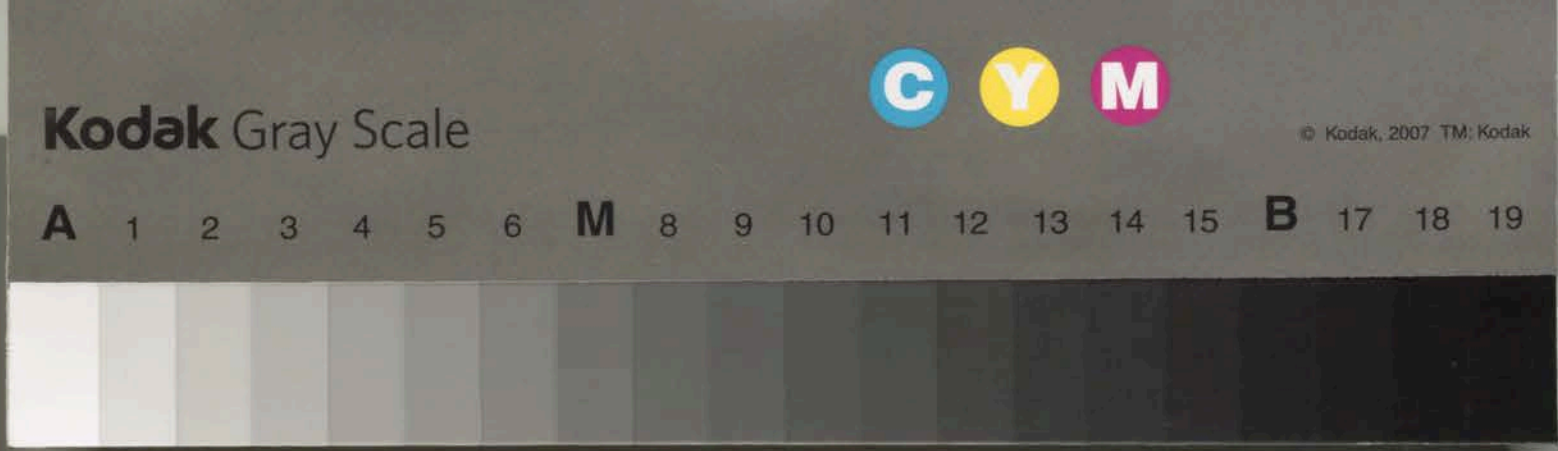
五梅は綱房の切を賞して宇都宮を  
 地を割て与ふるといふハ予に出せし心中  
 録那須記と同日乃談や但し壬生物  
 活ハ國綱といへるハ大に誤り也國綱ハ  
 宇都宮廿二代目にて慶長二年乙酉  
 十月十二日大岡秀吉公の勅氣を蒙りて  
 没落せし人ト云小田原落城と云ハ是  
 之後やききハ廊城一覽乃説論を待

押原推移録上ノ卷  
 十五

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





古戦録云永福元年上杉輝房入道  
 鎌信是非に小田原を去りて関八州管  
 領の職を全せんとして奥州會津の  
 領主芦名左京大夫善氏を調へ合せ春日  
 山乃城を築き津川口より乱入し奥州  
 半の手に属し野州の地一出陣し小山系  
 結城を攻む兩城皆防多事終つて藤  
 成を降し降参り斯く都賀郡に兵を  
 進め壬生鹿沼の兩城を壬生下総守  
 綱房嫡子彦五郎氏勝を責從ひ破れ  
 の勢に乗し宇都宮三郎左衛門廣綱  
 の宿城に押結常陸乃海道を用く  
 たり真岡多切上之河本の枝城より  
 軍兵を掛らせり終ふ宇都宮も敵する  
 事能は上杉の幕下子属に云々以上摘要  
 宇都宮系圖跋以て按じ此時廣綱僅  
 九才也父尚綱那須と戦討死後一族

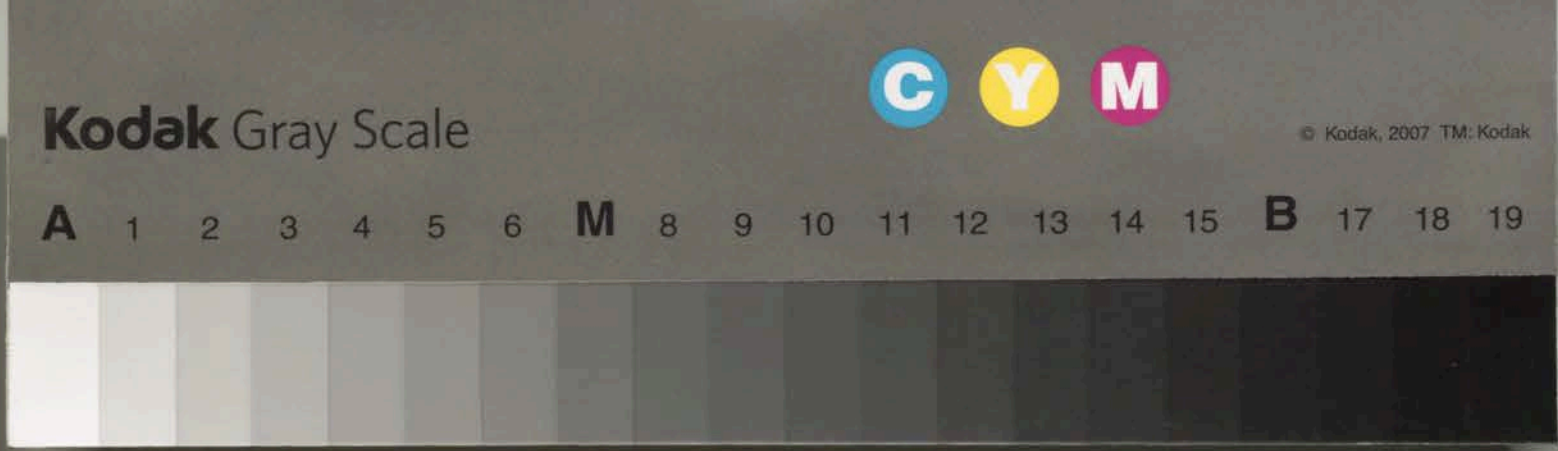
押原推移録上ノ卷

六

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





芳賀左工門後見して城を守り  
 ○因に記以宇都宮重代補翼紀清兩黨と  
 稱する常陸國中里の城主益子四万二千石  
 下野國真岡城主芳賀也五万石余  
 又云永禄四年三月輝席上洛して將軍  
 家子拜得せんとの志を發し之國峠越り  
 上州厩橋に入城して再小田原の城を攻  
 んとい相隨ふ輩は上野國は長野左門  
 太史長尾新五郎横瀬雅樂公桐生大炊  
 丹波川相模守安中越前守又子小幡國  
 書介白倉左工門佐大胡武蔵守森下之  
 河守富岡主祝公大戸丹後守尾高左兵  
 衛佐長根雅樂公齋藤越前守深津  
 刑部少輔宮崎和泉守後閑刑部之丞  
 谷備中守野州之守都宮の軍司代城芳賀  
 左衛門佐佐竹の陣代長倉遠江守壬生  
 下総守長沼山城守近藤大隅守西方遠  
 江守佐野軍代常陸多賀谷笠間茂木

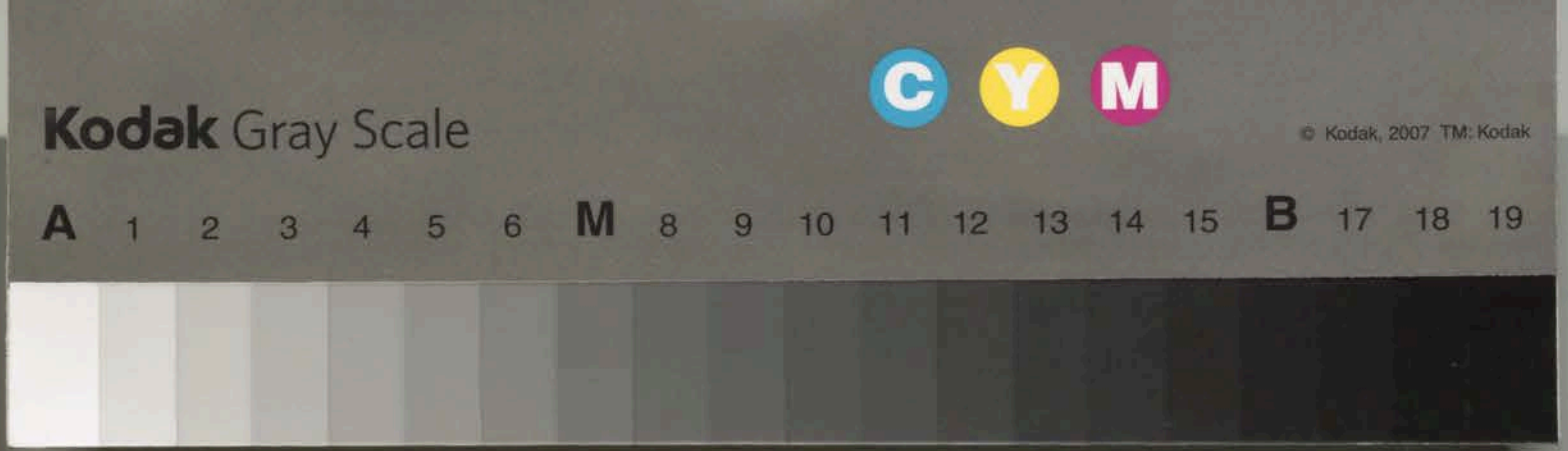
押原推移録上ノ巻

十七

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





武藏子小幡之河守木部宮内少輔長井  
 豊前守是等を宗徒の輩として大将  
 合七十六人軍勢十一万七千余騎を率  
 へて  
 按て此文を以て名を以て原直古河  
 の幕下なる一可晴氏没後弘治  
 永禄乃頃上杉の麾下に属せり也  
 五代目  
 上総介義雄 初名氏膳  
 天正四年壬生城に在りて天網房の横死を  
 聞て太子を急ぎ鹿沼城に参向し  
 叔父徳市齋を殺し之を仇を報し麾下  
 を要し之を以て鹿沼城小居し老臣  
 を以て壬生城を守らしむ天正十五年  
 丁亥四月廿七日再今宮の祠上ツキ薨す  
練礼本に存して今宮の社頭あり 未だ出で 同十八年 庚寅小田原に出  
 陣し竹浦口を守り七月八日酒匂川を  
 率て法名寒光院殿雄山文英大居士今現小西鹿沼村  
雄山寺に碑あり未だ模写縮字してあり 義雄男子あきて統を絶し

押原推移録上ノ巻

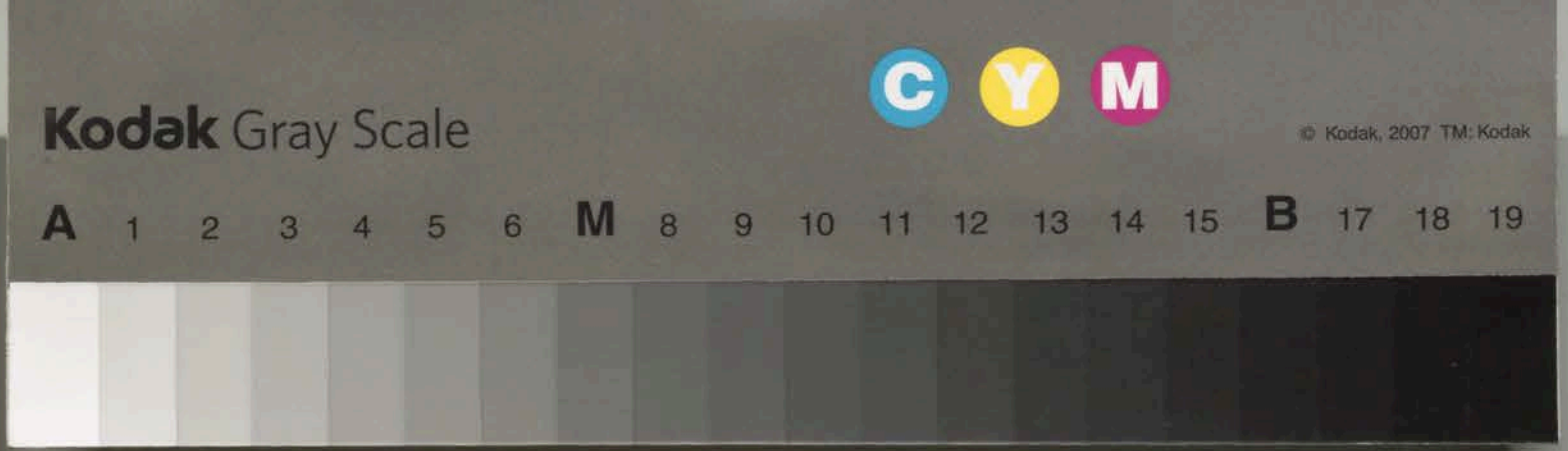
六

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1







故に壬生唐沼乃西城のついでに陥て家臣  
 潰散し志ある家臣等義雄の後室  
 女子を扶かして同國下南摩郷古城山  
 の麓に居る後壬生家城主日根楚織部  
 正高吉是を憐みて五石計りの田を以  
 て母子を赤塚村に養ふと云  
 又按て一説は義雄の女子後室妻木平  
 十郎に再嫁して以て了事既し廊下一覽  
 にもいけしむる事全傳寫の誤り之妻木

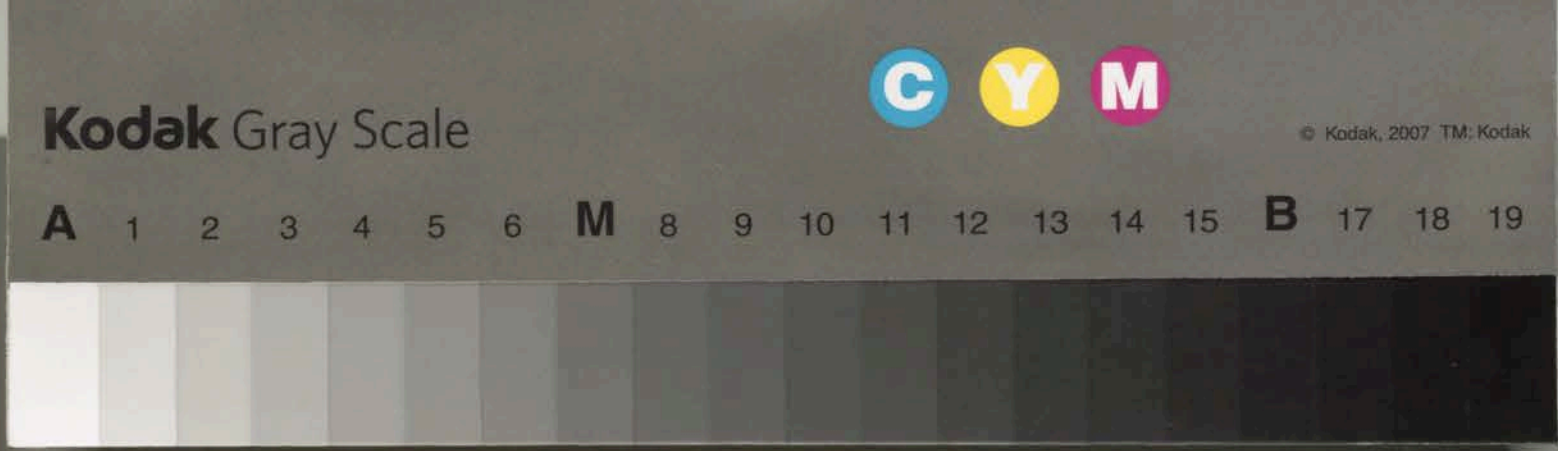
氏子嫁せし後室の假親となりて送  
 らしむる婢も之初め南摩城主一式  
 氏乃許ありし時にも附添しありしや  
 村に移住せし時にも附添しありしや  
 一書云 書名あり奥書に元和元年 徳常高兄綱房  
 沙門妙意書とありしや  
 一書云 唐沼城を奪はんとして衆臣  
 を殺ししや

押原推移録上ノ巻  
 十九

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1





ののまに服せし謀相あつてよ世に  
 心大に周章にありは義雄壬生を  
 改めると聞て禍我身に及ぶるを  
 計りて兼て交り深き多氣城主芳  
 賀善可う許に走りて隠る義雄を  
 聞て大に怒り直一に兵を進めく多  
 事場に押寄て接戦に宇都宮尚  
 綱の男弥二郎廣綱是を聞て徳節  
 多う行状悪む一然りとて義雄乃  
 節齋ハ討つとも芳賀ハ何の怨もあらん  
 義雄乃軍配頗あふと聞て一芳賀  
 いふん其敵せんや芳賀を討せよ討ふ  
 急さ様を出しとて動静に成ん  
 機変りて守り利害を解て義雄と  
 芳賀不和睦をさしめ徳節多を義  
 雄に討て恨みの残きやうにあらん  
 とて軍兵七百騎を引率し多氣城  
 馳向ひ義雄の志を合せて徳節齋を

押原推移録上ノ巻

二十

142 鹿沼地区石橋町 鈴木成雄家文書

C46-9-1

